第４次調査

１．調査の概要　土地区画整理事業地内の区画街路部分（５トレンチ）及び防火水槽建設予定地（６トレンチ）について調査を実施した。５トレンチは、平成10年度から継続して調査を実施した。

５トレンチ　第１・２次調査２トレンチの南側で、明石川の土手に沿ってつながる部分である。

第１遺構面　土坑１基を検出した。

ＳＴ101　丸みをもった十字形の浅い土坑で、火葬人骨と炭化材が充満しており、長さ３～５cmの鉄釘６本と土師器皿１枚が出土した。検出状況から死体を茶毘に付した遺構と考えられる。

第２遺構面　隅円長方形の落ち込み１基と南に向かって緩やかに傾斜する大きな落ち込みを検出した。

ＳＸ201　長さ4.7m、幅2.7m、最大の深さ33cmを測る。出土遺物から、14世紀前半の遺構と考えられる。

第３遺構面　掘立柱建物１棟と溝状遺構１条を検出した。11世紀後半の遺構面と考えられる。

ＳＢ301　２間×３間の掘立柱建物で、調査区の東側に延びるものと考えられる。Ｐ４では柱痕に沿わせて掘形内に土師器皿を１枚納めている。Ｐ２では柱抜き取り後に須恵器の椀と小皿が放り込まれている。これらの遺物から判断して、11世紀後半に建てられ、12世紀前半には廃棄されたものと考えられる。

第４遺構面　第４遺構以下は奈良時代後半以降の流路となっており、砂礫が厚く堆積している。標高約３mまで掘削したが、湧水が激しいこともあり、流路の底部及び他の遺構面は確認できていない。砂礫層からは磨滅した弥生時代前期から奈良時代の土器が出土している。

南部では杭列を確認したが、その上部構造や時期については不明である。

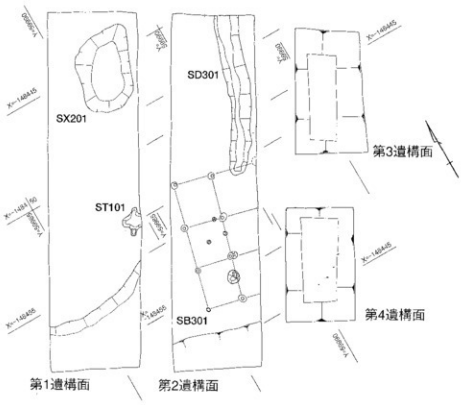


fig. 352
５トレンチ平面図

fig. 353　ＳＢ301

fig. 354　ＳＢ301－Ｐ２

６トレンチ　第３次調査４トレンチの北側に隣接する調査区である。５トレンチに対応すると考えられる第１・２遺構面では、遺構は全く検出していない。

第３遺構面　柱穴２基、ピット６基、溝状遺構１条を検出した。

ＳＢ302　直径30㎝、深さ30㎝の柱穴２基を検出した。柱穴は、両者とも掘形底部に土師器あるいは須恵器の小皿を置き、その直上層に須恵器甕の体部片を礎盤として据えている。柱痕は直径12㎝である。検出状況から、掘立柱建物を構成するものであると考えられる。

第４遺構面　落ち込み状遺構１ケ所を検出した。

ＳＸ401　最大幅1.3ｍ、最大の深さ10㎝を測る落ち込み状遺構で、底面でピット１基を検出した。ピット内から素文鏡（直径4.5㎝）が１点出土した。奈良時代後半の土器が出土している。

第５遺構面　土坑１基、溝状遺構１条、土坑状落ち込み１基、ピット２基を検出した。

第６遺構面　土坑１基、溝状遺構１条、落ち込み１ケ所、ピット１基を検出した。

ＳＫ601　幅1.8ｍ、長さ3.8ｍ、深さ13㎝の土坑で、古墳時代後期末の須恵器片が出土した。

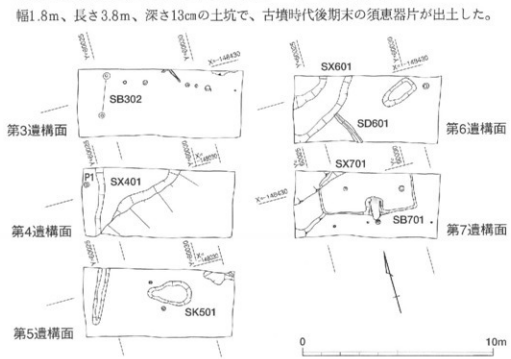


fig. 355
６トレンチ平面図

第７遺構面　竪穴住居１棟、ピット４基を検出した。

ＳＢ701　方形の竪穴住居で、南半部分のみ検出した。東西5.0m、南北2.2m以上で、最大壁高は20cmである。南側周壁のほぼ中央に竈を造りつけている。床面が南西に向かってわずかに傾斜している点が特徴的で、床面で主柱穴を２基確認した。

竈は長さ1.2m、内法最大幅40cmで、焚口は堅く焼け締まっている。焚口のすぐ奥側には、土師器高杯を伏せた支脚が設置されている。

床面から、完形品を含む土師器や製塩土器、滑石製臼玉が出土している。古墳時代中期後半の遺構と考えられる。

なお、第７遺構面より下層では、弥生時代中期及び後期の土器が若干出土しているが、遺構面とは認定できなかった。

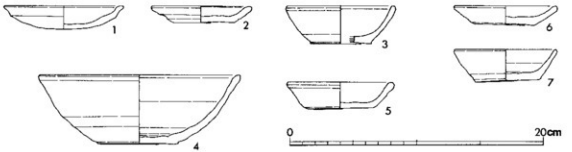
小　結　今回の調査においては、調査対象面積が限定されていたなかで、多くの成果を得ることができた。平成８～９年度の調査成果とあわせて、当遺跡の様相がさらにめいかくになってきたものと考えられる。

遺構については、古墳時代中期後半の竪穴住居と平安時代後期の掘立柱建物をそれぞれ確認したことは、各時期における居住域の範囲を限定できるものと把握することが可能で、律令期の遺構の確認も含めて当遺跡の位置づけを考えていく上で重要といえよう。

また、遺物については、古墳時代中期後半の滑石製品の出土が注目され、これまでの調査成果と合わせて、当該期の新方遺跡での滑石玉類の製作を如実に示す資料と位置づけることができよう。さらに、竪穴住居床面から一括で検出できた土師器群も、当地域での須恵器出現前後の土師器群として重要な位置を占めるものと考えられる。

奈良時代後半と考えられる素文鏡は、出土遺構そのものの性格は判然としないものの、古代山陽道に沿った官衙関連遺跡と考えられている吉田南遺跡との関連を今後考えていかなければならない資料といえる。

以上のように、新方遺跡野手西方地点の調査成果は、新方遺跡の範囲に止まらず、現明石川の対岸に広がる吉田南遺跡との何らかの関連性を窺わせる内容を示している。



1　５トレンチ　ＳＢ301－Ｐ４掘形　土師器小皿
2　５トレンチ　ＳＢ301－Ｐ４掘形　土師器小皿
3　５トレンチ　ＳＢ301－Ｐ２掘形　須恵器小皿
4　５トレンチ　ＳＢ301－Ｐ２柱底　須恵器椀
5　５トレンチ　ＳＢ301－Ｐ２柱底　須恵器小皿
6　６トレンチ　ＳＢ302－Ｐ１柱底　須恵器小皿
7　６トレンチ　ＳＢ302－Ｐ２掘形底　土師器小皿

fig. 356　出土遺物実測図

第５次調査

１．調査の概要　今回の調査区は、区画街路部分の７トレンチ及び８トレンチである。

現地表面から50㎝下で第１遺構面を検出した。他の調査区の状況と比較すると、地形的に最も安定した立地であるといえる。しかし古墳時代以降の耕作による削平の影響を受けており、遺物包含層の保存状況は悪い。古墳時代中期にも大きく削平を受けているために、弥生時代前期から古墳時代前半の遺構を、ほぼ同一面で検出しており、各遺構の所属時期は出土遺物の整理作業の進捗を待って確定する必要がある。

７トレンチ　５面の遺構面を確認した。

第１遺構面　古墳時代後期から平安時代後期の遺構を検出している。

平安時代後期の遺構・遺物は少なく、柱穴を少数検出したに止まる。古墳時代後期前半の遺構としては、木棺墓１基、土坑墓２基、掘立柱建物に伴う多数の柱穴を検出した。

第２遺構面　第１遺構面と同じく、古墳時代後期前半の遺構面である。ＴＫ23からＴＫ47型式の須恵器が出土している。第１遺構面との遺物による時期差は認められないが、遺構の重複関係等から確認した。第１遺構面で検出した遺構の大半が掘立柱建物であるのに対し、第２遺構面では６棟の竪穴住居が存在し、これまでの当地区の調査結果と同様である。

竪穴住居は何れも一辺約４ｍ前後の方形のもので、当地区で一般的な規模をもつ。

fig. 357　７トレンチ平面図

fig. 358　７トレンチ全景

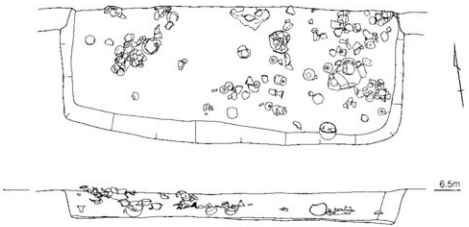


fig. 359
ＳＢ401平・断面図

ＳＢ401は高坏を中心とする多量の廃棄土器が検出され、陶質土器が１点含まれる。他に、造り付けの竈をもつ住居が２例あり、何れも住居の西側に設けている。竈は北側に設けるのが一般的であるが、野手・西方地区における同時期の竈の設置位置に制約は認められず、今回の例も、当地区の特徴を示しているといえる。

第３遺構面　弥生時代中期前葉から中期中葉の遺構面である。区画溝、土坑等を検出した。

区画溝は、幅3.5m、深さ1.6mの規模で、弥生時代前期から中期中葉の遺物が多量に出土した。当遺構は、第２次調査のＳＤ501につながるものである。

第４遺構面　弥生時代前期後半の遺構面である。木棺墓２基、土坑、柱穴等を検出した。

第５遺構面　弥生時代前期後半以前の遺構面である。柱穴、土坑、区画溝等を検出した。

区画溝は中期の区画溝と合流し、前期の段階では２条存在したと考えられる。ＳＤ501は前期のうちに埋没しており、第２次調査における同時期の溝の埋没状況に一致する。

特記すべき遺物として、有柄式磨製石剣を遺構面上面で検出した。

小　結　野手西方地区において、最も盛行する時期である古墳時代後期前半の遺構は、第２次調査と同様の様相を示しており、居住域の広がりが確認できた。また、同一の遺跡内で、弥生時代前期から古墳時代の人骨を良好な保存状況で検出し、第１次調査の成果と合わせ、同一地域での、人骨の形質学的変化を確認できる資料を得ることができた。

第８号人骨は、古墳時代の集落内の墓から検出された極めて珍しい例である。現在まで確認されている古墳時代の人骨は、有力者の墓である古墳の埋葬施設からの出土が大半で、今まで明確ではなかった一般の人々の姿や埋葬姿勢を復元できる資料といえる。

第12・13号人骨に関しては、近畿地方の弥生時代人骨の中ではもっとも保存状況が良好で、当時の人々の体形や顔立ちが確認できる資料といえる。近畿では、弥生時代前期の人骨資料が乏しく、前回調査分を含め、当遺跡で複数体出土した資料は、縄文時代から弥生時代にかけての人々の形質的な変化の実態を明らかにできるものであるといえる。

埋葬施設に関しては、伝統的（縄文時代的）な埋葬姿勢（屈葬）で、幅が広く短い木棺に埋葬される事例（第13号人骨）と、大陸の影響を受けた埋葬姿勢（伸展気味）で、細長い木棺に埋葬される事例（第12号人骨）を確認した。埋葬方向は互いに直交し、人骨の形質にも差異がみられ、この違いは系統（出身集団）の違いを示している可能性がある。

８トレンチ　便宜的に１区と２区に区分する。４面の遺構面を確認したが、２区の第４遺構面は工事の影響深度の関係で調査を実施していない。

第１遺構面　中世の遺構面と考えられる。溝、ピット、耕作痕を検出した。

１　区　耕作痕を確認しており基本的に生産域と考えられるが、幅広の溝状遺構も確認している。

ＳＤ101　幅約1.0ｍ、深さ約15㎝を測る流路状の溝で、須恵器と土師器の細片が出土している。

２　区　耕作痕を確認しており、１区と同様に生産域と考えられる。ピットも検出しているが、建物等の並びは不明である。

第２遺構面　古墳時代後期の遺構面と考えられる。竪穴住居４棟、掘立柱建物２棟、溝、土坑、柱穴を検出した。

１　区　古墳時代後期の竪穴住居２棟、掘立柱建物１棟を含む、多くの遺構を確認している。７トレンチから続く集落の居住域である。柱穴等も多数検出している。

ＳＢ201　１区の南半で検出した方形の竪穴住居である。東西1.2ｍ以上×南北4.5ｍ以上で、深さ約13㎝を測る。柱穴は確認していない。住居内で炭化材を多く確認し、焼失住居の可能性がある。古墳時代後期の土師器片が出土している。

ＳＢ202　１区の中央付近で確認した、方形の竪穴住居である。東西2.0ｍ以上×南北約3.6ｍ、深さ約23㎝を測る小型の住居跡である。柱穴は確認していない。周壁溝から、古墳時代後期の土師器片が出土している。

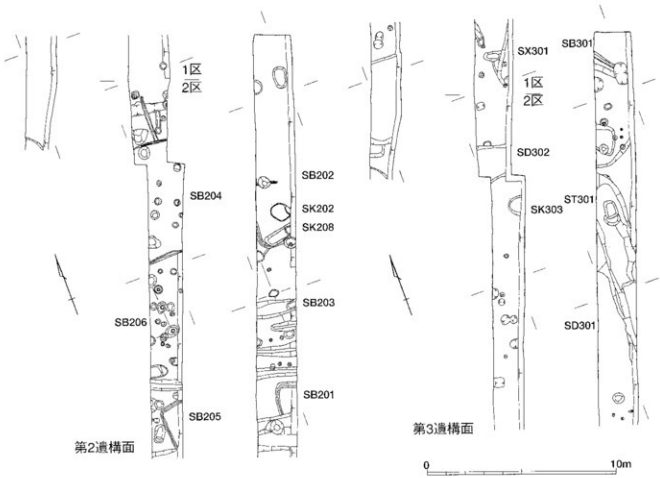


fig. 360　８トレンチ第２・３遺構面平面図

fig. 361　8 トレンチ 1 区第 2 遺構面全景

fig. 362　8 トレンチ 2 区第 2 遺構面全景

S B203　東西 2 間以上×南北 2 間を測る、総柱の掘立柱建物である。建物方位は真北から西へ約 2 度の方向である。柱穴は幅約40～60㎝、深さ約15～37㎝、柱穴間の距離は、東西約1.9 m、南北約2.2mを測る。土師器の細片が出土している。

S K202　東西約1.08m×南北約0.92m、深さ約26㎝を測る楕円形の土坑である。壁面はほぼ垂直に落ち込み、土坑底部から甕の破片が出土している。

S K208　東西約1.6m以上×南北約0.5mの長方形を呈する土坑である。深さ約30㎝を測る。土師器の破片が出土している。

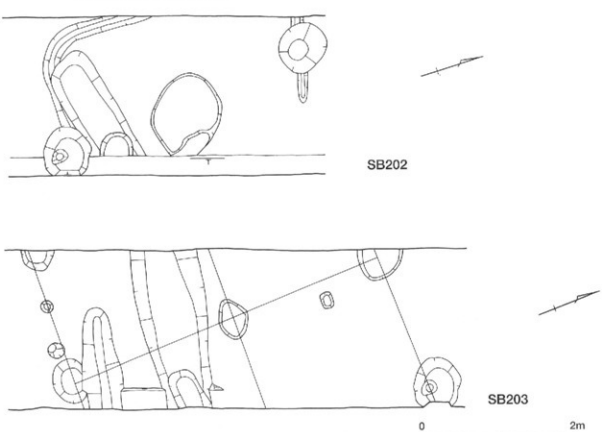


fig. 363　S B202・203平面図

２　区　　南端部分で１m以上急激に落ち込み、微高地が途切れる。それに伴い１区から続く居住域も終息する。微高地上では竪穴住居２棟、掘立柱建物１棟を含む多くの遺構を確認した。

ＳＢ204　　南北幅約6.0mを測る大形の竪穴住居である。深さ約15cmを測る。柱穴は多数確認しているが、その並びは不明である。また、トレンチ北西隅で、幅約60cm、深さ約10cmを測る浅い土坑を確認している。土坑の壁面は焦土化しており、竈等の存在も考えられる。

ＳＢ205　　竪穴住居の北西隅を検出した。東西幅約1.4m以上×南北幅約2.2m以上、深さ約11cmを測る竪穴住居である。柱穴等の内部施設は確認していない。

ＳＢ206　　東西１間以上×南北２間以上を測る掘立柱建物である。建物方位は真北から西へ約２度の方向である。柱穴は幅約60cm、深さ約35～54cmで、柱間は東西1.3m×南北1.3mを測る。須恵器、土師器の細片が出土している。

第３遺構面　　弥生時代前期から中期前半の遺構面である。竪穴住居１棟、溝内合葬墓１基、溝、土坑、柱穴を検出した。

１　区　　竪穴住居１棟と溝内合葬墓１基を検出している。

ＳＢ301　　直径約5.5mを測る円形竪穴住居である。深さは約25cmを測る。出土遺物から弥生時代前期後半と理解でき、獣骨も多数検出した。柱穴は多数検出したがその並びは不明である。

ＳＤ301　　幅約2.8m、深さ約1.3mを測り、ほぼ南北方向に延びる溝である。極細砂質シルトが堆積し、弥生中期前半の土器が前期の土器に混じり出土している。

溝の底に土壙墓が掘られており、２体の人骨が確認されたことから、合葬墓であると理解できる。（第10号人骨・第11号人骨）

ＳＸ301　　１区の南東隅で検出した。幅東西約60cm以上×南北約3.6m以上、深さ約50cmの落ち込みである。弥生時代前期後半の遺物が出土している。

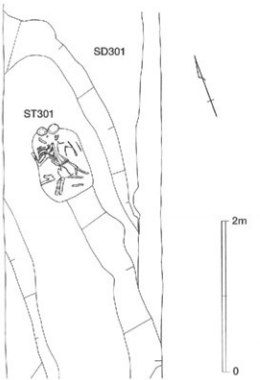


fig. 364　ＳＤ301・ＳＴ301平面図

fig. 365　ＳＤ301・ＳＴ301

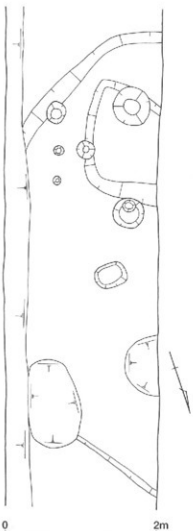


fig. 366　ＳＢ301平面図

fig. 367　ＳＢ301

２　区　　弥生時代前期後半から中期前半の遺構面である。１区と比較して遺構は散漫で、居住域の南端付近に位置している。調査区の南側は微高地から外れ、１ｍ以上落ち込んでいる。

ＳＤ302　　２区の北端付近で検出した。幅約1.8ｍ、深さ約12㎝を測る浅い溝で、東西方向に延びる弥生時代前期の遺物が出土している。

ＳＫ303　　２区の北端付近で、東壁際で検出した。幅約90㎝、深さ約10㎝を測る浅い土坑である。弥生前期の遺物が出土している。

第４遺構面　　弥生前期後半の遺構面である。土坑、柱穴を検出した。工事の影響深度の関係で、１区のみ調査を実施した。

１　区　　ピットを多数検出した。ただし柱穴等の並びは確認していない。

ＳＫ401　　調査区の北東隅で検出した土坑である。幅約50㎝、深さ約12㎝を測る。弥生時代前期後半の遺物が出土している。

ＳＰ401　　調査区のほぼ中央で東隅から検出した。幅約40㎝、深さ約40㎝を測る。弥生時代前期後半の遺物が出土している。

ＳＰ402　　調査区のほぼ中央で検出した。幅約30㎝、深さ約30㎝を測る。遺物は出土していない。

ＳＰ403　　幅約20㎝、深さ約11㎝を測る。弥生時代前期後半の遺物が出土している。

小　結　　8トレンチでは4面の遺構面を検出し、中世、古墳時代後期、弥生時代前期から中期前半、弥生時代前期の遺構を確認した。

第1遺構面では中世の耕作痕を多く検出しており、集落の生産域であった様である。他に柱穴も確認しており、付近に居住域が存在することも考えられる。

第2遺構面では古墳時代後期の竪穴住居4棟に掘立柱建物2棟を検出し、居住域の主要な部分をしめている。幅約6mを測る大形の竪穴住居が検出されたほか、掘立柱建物の方位はともに真北から約2度西へ振っており、建物の方向がそろっている。

またトレンチの南端では遺構面が急激に落ち込んでおり、微高地から外れると共に居住域も途切れる。

第3遺構面では弥生時代前期の竪穴住居と弥生時代中期前半以前の土壙墓が検出されている。調査範囲が狭く、居住域と墓域の関係は不明である。竪穴住居の他にも柱穴や土坑が確認されており、あるいは周囲に弥生時代前期の居住域が存在していたものが、中期に墓域が拡大したとも考えられる。

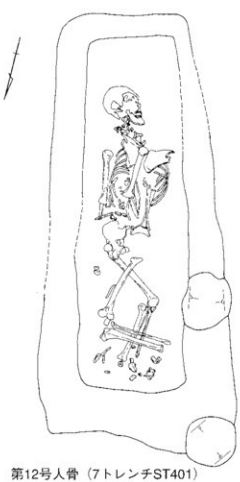
第4遺構面では弥生時代前期の柱穴を確認している。掘立柱建物や竪穴住居は確認していないが、居住域に含まれる可能性も考えられる。

人骨一覧

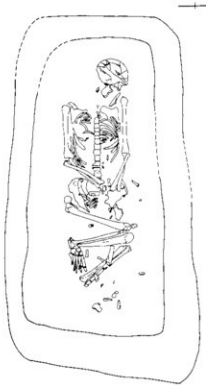
	8号人骨	9号人骨	10・11号人骨	12号人骨	13号人骨
時　期	古墳時代中期	古墳時代中期	弥生時代中期前葉以前	弥生時代前期中葉	弥生時代前期中葉
埋葬施設	木棺墓	土坑墓？	溝状遺構内土坑墓	木棺墓・頭位に小口板の痕跡	木棺墓
埋葬方法	側臥屈葬（？）	不明	仰臥屈葬か？2体埋葬	側臥・脚部の不自然な交差	仰臥屈葬
性　別	女性	不明	不明	男性	女性
身　長	145から150cm	不明	不明	160cm前後	155cm程度
死亡年齢	40から60歳	不明	不明	30から40歳	40から60歳
身体的特徴	華奢・頭蓋骨は大きい	左右の上肢骨のみ残存	両足屈曲の可能性あり	歯槽性突顎強い	かなりの長頭
抜　歯	なし	不明	不明	右上犬歯の抜歯（調査中）	調査中
咬　耗	左下第1大臼歯の鞍状咬耗	不明	不明	咬耗は少ない	調査中
出土石鏃	なし	なし	なし	逆鋸1点	2点 （胸部骨面1点・遊離1点）
疾病他	不明	不明	不明	不明	腰椎に嚢状骨増殖あり 骨体異常あり
備　考	肘・膝を強く曲げる	上腕骨・尺骨・橈骨は交連状態	保存状況は悪い	縄文人的特徴は少ない 鹿角製指輪6点	右寛骨上にイノシシ牙

第8号人骨（7トレンチST301）

第10・11号人骨（8トレンチST301）



第12号人骨（7トレンチST401）



第13号人骨（7トレンチST402）

fig. 368　8・10～13号人骨平面図

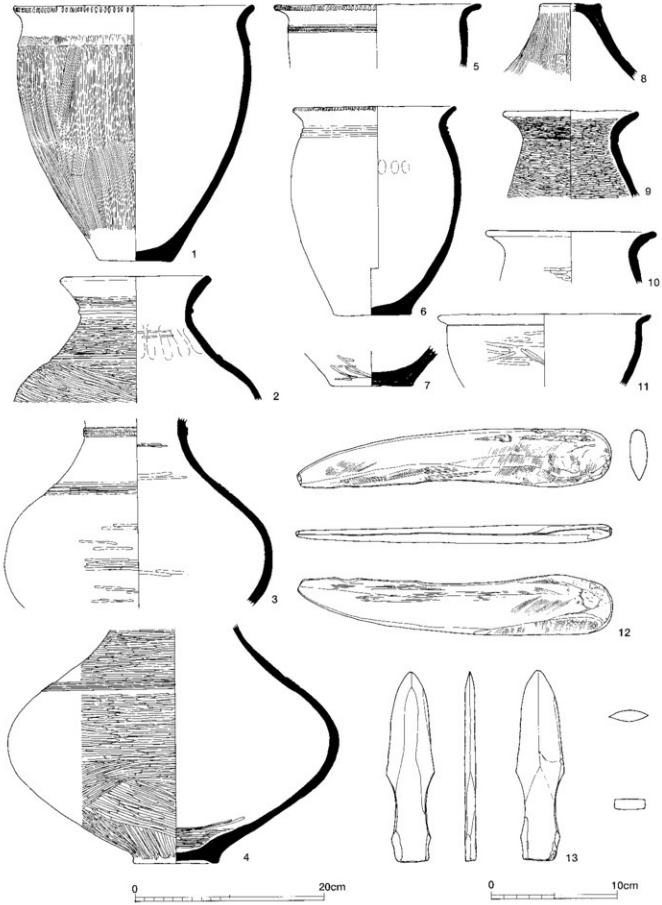


fig. 369　出土遺物実測図　　1～4 7トレンチSX401　5～11 8トレンチSB301　12 遺物包含層　13 7トレンチ第5遺構面直上

第 6 次調査

1．調査の概要　水路部分及び道路部分にあたる、9～11トレンチについて調査を実施した。

9トレンチ　第5次調査の8トレンチに続く調査区である。古墳時代から中世に至る遺物を検出したが、明瞭な遺構は存在しなかった。工事影響深度（T.P.5.5m）まで掘削を行い、調査を終了した。

南区においては、水路設置時の攪乱が、今回の工事影響深度以下に及んでおり、文化財が残存しないことを確認した。

10トレンチ　4面の遺構面を調査した。現地表下約60cmで検出した遺構面は、近世の耕作により削平を受けており、影響を強く受けた部分では、平安時代後期から近世に至る遺構が、同時に検出された。埋土により、上層遺構、下層遺構と二分することが可能である。暗灰色粘質土を埋土とする遺構は、出土遺物および層位的にも、確実に12世紀後半から13世紀前半に遡ることが確認できたため、当埋土の遺構を第2遺構面検出遺構とし、それ以外の埋土の遺構を第1遺構面検出遺構とした。

第1遺構面　柱穴のほか、土坑1基を検出した。時期は、12世紀後半から13世紀前半のものが大半を占めるが、条里に沿った掘立柱建物や溝は、近世に属する。

SX101　1.0m×1.2mの方形の土坑である。出土遺物から、12世紀末頃の遺構と考えられるが、性格は不明である。

柱穴　60基を超える柱穴を検出したが、建物としてのまとまりを確認できたのは1棟である。この掘立柱建物は、条里方向に一致しており、近世に属するものと考えられる。そのほかの柱穴は平安時代後期の遺構であるが、建物としてのまとまりは確認できなかった。

fig. 370
10トレンチ全景

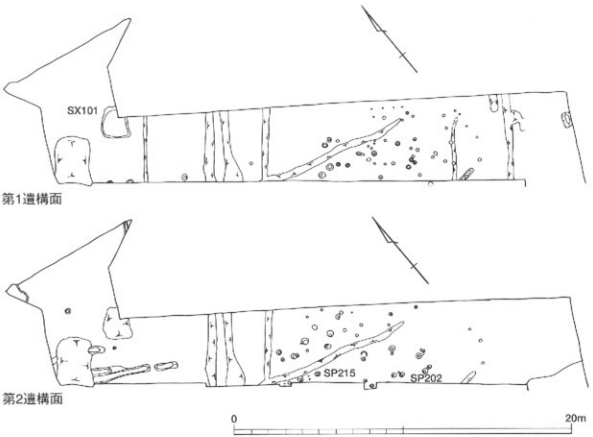


fig. 371　10トレンチ第１・２遺構面平面図

第２遺構面　検出した遺構は、柱穴、土坑、溝等である。遺構の大半は柱穴であるが、建物としてのまとまりは不明である。

ＳＰ202　直径40㎝の円形の柱穴である。柱を抜き取った後に流入した埋土から、須恵器甕、椀、土師器皿の破片が出土した。

ＳＰ215　長径55㎝、短径40㎝の不整円形の柱穴である。掘形より須恵器椀、土師器皿が出土した。地鎮に伴う遺物である可能性が考えられる。

第３遺構面　古墳時代前期の遺構面である。土坑と性格不明遺構を検出した。

ＳＫ301　調査区の南端で検出したため、形状は不明である。古墳時代前期初頭の遺物が出土した。

ＳＸ301　調査区の北端で検出したため、形状は不明である。検出長6.5ｍの緩い弧を描く、不整円形の遺構である。竪穴住居の可能性が考えられるが、壁面の傾斜が緩く、断定できない。

遺構底面より、土坑１基、柱穴１基を検出した。

土坑　長径1.5ｍ、短辺1.0ｍの不整形で、埋土より土師器長頸壺が１点出土した。

第４遺構面　弥生時代中期後半の遺構面である。調査区の西半部分で自然流路を１条検出した。

自然流路　最深部の深さが約2.2ｍの流路で、北東方向から南西方向に流れる。弥生時代前期後半から中期後半の遺物が出土したが、最終埋土からは、中期後半の比較的大型の土器片が出土しており、当時期には埋没していたことが確認できる。

ＳＫ401　自然流路が埋没した後、土坑が１基掘削されている。長径95㎝、短径75㎝、深さ30㎝の不整形の土坑である。炭化材および焼土面が検出され、焼成に使用された遺構である。

小型の壺が１点出土した。焼塩に使用された遺構の可能性がある。

11トレンチ　遺構面を2面検出した。

第1遺構面　12世紀後半の遺構面である。柱穴のほかに用途不明土坑2基を検出した。柱穴は、建物としてのまとまりは認められない。

SK101　長辺2m以上、短辺1.4m、深さ40cmの不整形の土坑である。須恵器甕の破片、板状の木製品が出土した。

SK102　調査区の南西端で検出した土坑であるため、形状は不明である。深さは10cm程度である。遺物の出土はない。

第2遺構面　調査区の西半部分が、西側に緩やかに傾斜する遺構面で、土坑、柱穴が数基検出した。出土遺物は少なく、時期を特定できない。

小　結　今回の調査地は、新方遺跡の南西端に当たる。弥生時代中期後半代に大きく地形が変容しており、自然流路が埋没する。この現象は、当時期に発生した明石川の氾濫と関係している可能性がある。当時期以降、古墳時代前期に至るまで、生活の痕跡は確認されない。野手・西方地区全域においても、同様の傾向がみられる。古墳時代前期以降は安定した生活面を形成し、平安時代後半に至るまで、生産域として利用されていたと考えられる。

平安時代後半から中世にかけては、新たに居住域が形成され、南に隣接する上池遺跡との関連が強くなる。

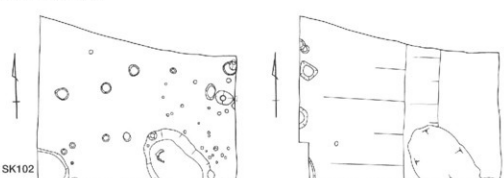


fig. 372
11トレンチ第1・2遺構面平面図

fig. 373
11トレンチ
第1遺構面全景

46. 今津遺跡　第13次調査

1．はじめに

今津遺跡は、明石川左岸の標高10m前後の沖積地に立地する弥生時代から室町時代に及ぶ集落遺跡である。これまでの発掘調査で弥生時代中期の竪穴住居や木棺墓、土坑墓等を検出している。

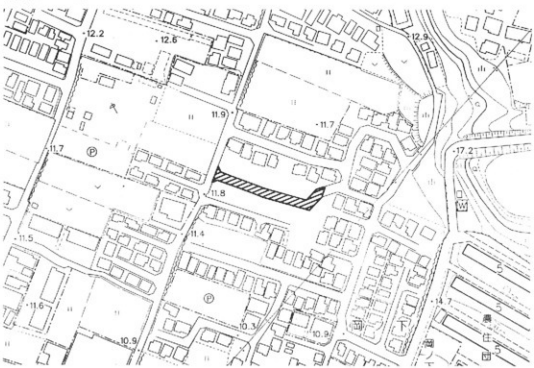


fig. 374
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

今回の調査は、宅地造成区域内の汚水管敷設工事部分の調査で、工事影響範囲（西側道路より約35mまでで、幅約1m）についてのみ調査を実施した。

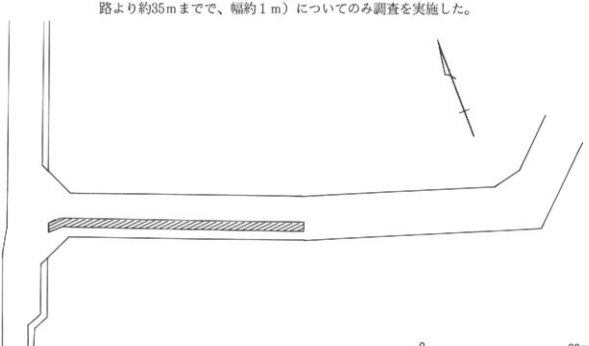


fig. 375　調査範囲位置図

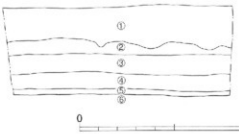


fig. 376
調査区東壁断面図

基本層序　基本層序は、①暗灰色シルト（直下層の小塊含む）－②灰色シルト－③浅黄色砂礫混じりシルト－④灰色シルト－⑤明黄褐色粘土－⑥にぶい黄褐色シルトとなっている。

②～④層中に遺物が少量含まれる。時期的には14世紀から15世紀と考えられる。

検出遺構　⑥にぶい黄褐色シルトの上面で土坑２基、ピット１基、自然流路２条を検出した。土坑及びピットについては遺物が出土していないため時期が明確ではないが、埋土から判断して中世のものと推測される。遺構面の標高は9.00m付近である。

自然流路は調査区の西半で検出した。西のＳＲ01西肩付近と、東のＳＲ02の最下層から弥生土器の小片が少量出土した。弥生中期後半のものと考えられる。

また、ＳＲ02の最上層からは須恵器の破片（時期不明）が出土している。

当該地区のすぐ北側で実施した第12次調査においても、弥生時代中期の自然流路を検出しており、今回のものはこれの続きと考えられる。

３．ま と め

今回の調査では、第12次調査において検出した遺跡がその南側にも広がっていることが確認できた。

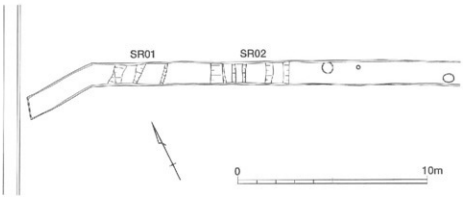


fig. 377
調査区平面図

fig. 378　調査区全景

fig. 379　ＳＲ02

47. 小山（こやま）遺跡　第4次調査

1．はじめに

小山遺跡は明石川左岸の河岸段丘上に位置する。平成5年以来これまでに3回の発掘調査を実施し、縄文時代の土坑、弥生時代前期の土坑、弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代前期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居、中世の土坑・溝などの遺構を検出しており、また弥生土器・土師器・須恵器・碧玉製管玉などの遺物を確認している。

fig. 380
調査地位置図
1：2,500

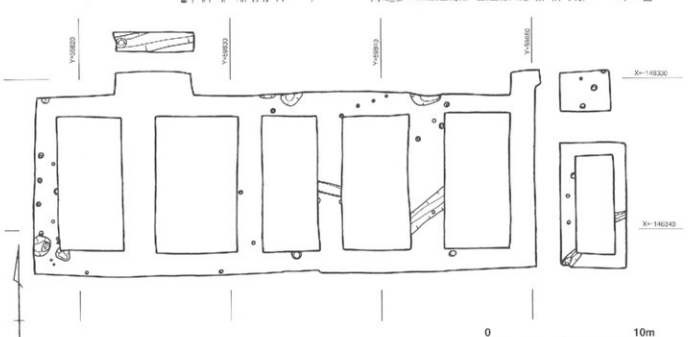


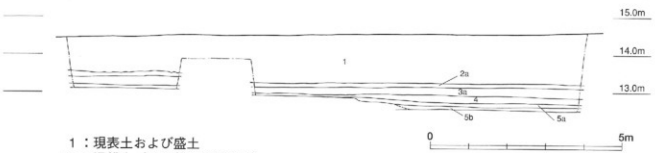
fig. 381　調査区平面図

2．調査の概要　今回の調査は、工事の影響を受ける建物基礎部分約200㎡について実施した。

その結果、遺物包含層として認識できる、洪水によって堆積した中世の砂礫層を確認し、土師器・須恵器などの遺物が出土している。この下層において遺構面を検出し、掘立柱建物、溝、弥生時代前期の土坑などを確認した。

また、遺物の整理が実施していないため確定できていないが、特筆されるべき遺物として、鏡片が古墳時代初頭と推定される土層から出土している。

3．ま と め　既調査の成果を合わせて勘案すると、今回の調査地は、当遺跡の中心部の一つである、第3次調査地の北西方向にある遺構密度の高い部分から、やや外れた部分に位置していると考えられる。



1：現表土および盛土
2a：旧耕土（区画整理以前表土）
3a：灰黄褐色砂質粘土
4：褐灰色砂礫質粘土（中世洪水砂礫）
5a：黒色砂礫質粘土（古墳時代前期？表土）
5b：灰褐色砂礫質粘土

fig. 382　調査区東壁断面図

fig. 383　第3トレンチ全景

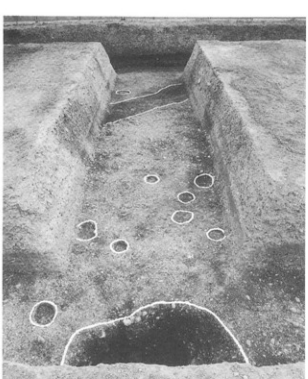


fig. 384　第7トレンチ全景

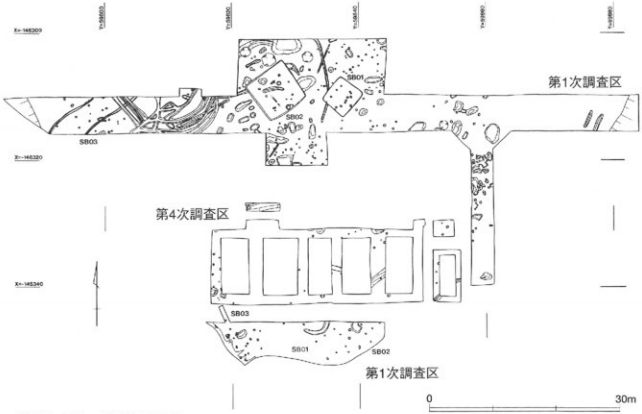


fig. 385　第1・4次調査区平面図

fig. 386　SK01・02

fig. 387　出土鏡片

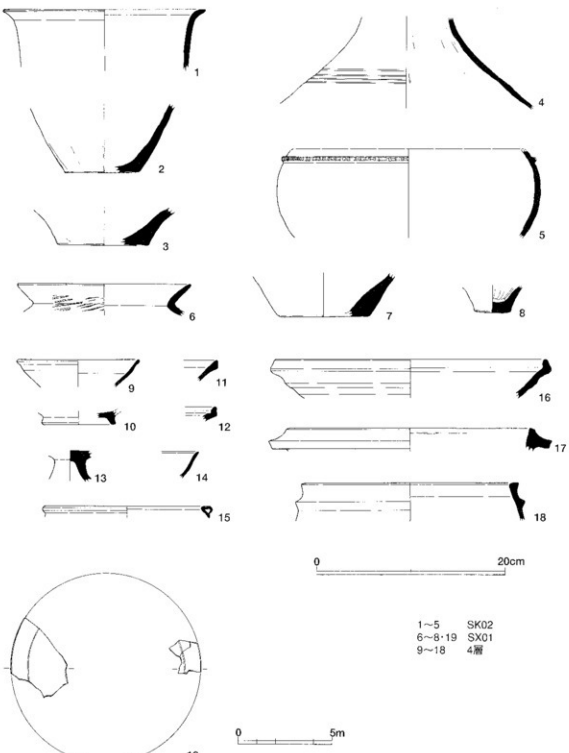


fig. 388 出土遺物実測図

48. 小山（こやま）遺跡　第5次調査

1. はじめに

小山遺跡は明石川左岸の河岸段丘上に立地しており、標高13～14m付近に位置する。これまでの調査の結果、弥生時代から中世にわたる複合遺跡であることが明らかになりつつある。

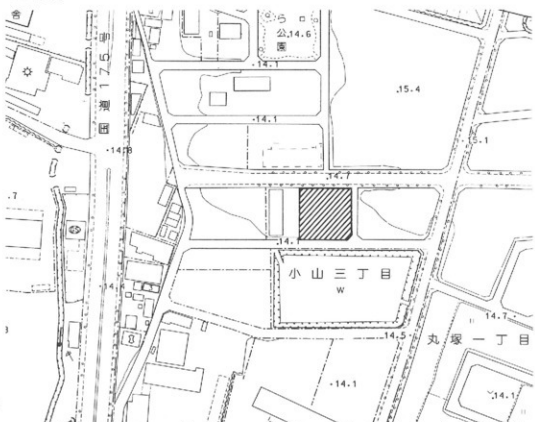


fig. 389
調査地位置図
1：2,500

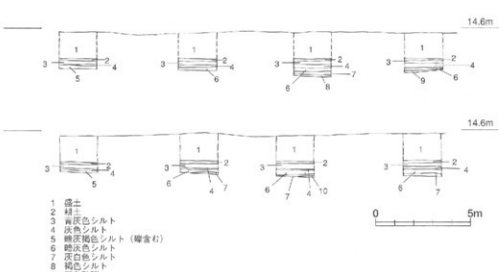


fig. 390
調査区断面図

2．調査の概要　今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、調査対象地区の範囲は南北20m、東西30mである。工事によって影響を受ける部分は、建物の基礎杭部分にあたるため、まず盛土及び旧耕土を除去した後、杭部分について深掘し、調査を実施した。

調査では、遺物包含層は確認できるものの、その出土量は少量であった。検出した遺構はピット1基である。

3．ま と め　全体として東側は、河道か湿地帯であったと考えられ、遺構の中心からみて、縁辺部に位置するものと考えられる。

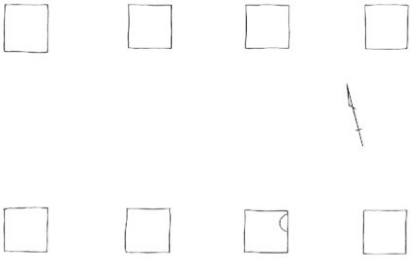


fig. 391
調査区平面図

fig. 392　調査区南半全景

fig. 393　調査区南壁

49. 神出古窯址群

1. はじめに

神出古窯址群は、神戸市域西端に拡がる印南野台地の一角に位置する、平安時代末期から鎌倉時代初めに操業された須恵器窯址群である。昭和50年代後半からの圃場整備事業に伴い、当該窯址の一部が発掘されて以来、調査は断続的に行われている。

これまでの調査で、窯址、粘土採掘坑、当該時期の集落等を確認しており、次第に遺跡の様相が明らかになりつつある。

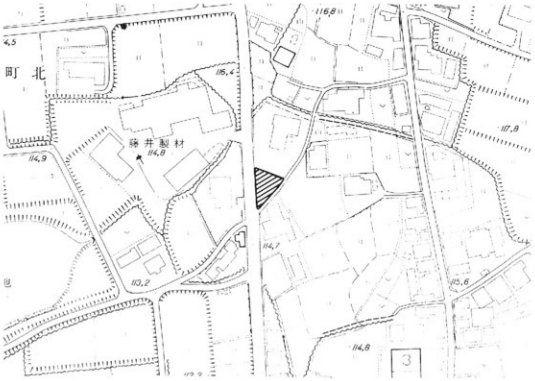


fig. 394
調査地位置図
1：2,500

fig. 395　SK03

fig. 396　SP03

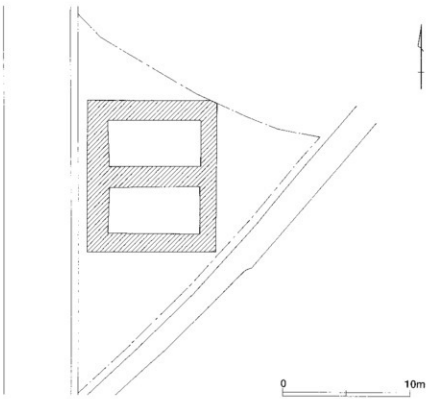


fig. 397
調査範囲位置図

2．調査の概要　当該調査地には農業倉庫が建設される予定であり、工事によって影響を受ける建物基礎部分について発掘調査を実施した。

基本層序　現況の耕土（黒色粘質土）の下層には黄灰褐色粘性砂質土（床土）が5～10cm程度堆積する。その下層には、平安時代末期から鎌倉時代初めの土器を含む灰色粘質土（遺物包含層）が堆積している部分と、それが消失して直に褐色混じり黄灰色砂質シルト（遺構面基盤層）を検出する部分とがある。

検出遺構　土坑3基、ピット11基、溝1条、落ち込み2ケ所を検出した。

ＳＫ01　調査区南東隅で検出した土坑で、規模は1.3ｍ×0.8ｍ、深さ約10cm程度を測る。

ＳＫ02　調査区南東部において、ＳＫ01の西側で検出した土坑である。規模は、1.1ｍ×0.8ｍ、深さ約10cm程度を測る。

ＳＫ01・02はともに平面形が楕円形を呈する土坑であり、何れからも須恵器、土師器、焼土が出土した。

ＳＫ03　北西部で検出された土坑で、規模は0.9ｍ×0.4ｍ、深さ約10cm程度で、中央部が若干くびれ、北半分の底面は赤く焼けている。中央部で軒丸瓦の瓦当部分が出土した。土師器小皿等の小型製品を焼く窯の残存部の可能性もあるが、判断の材料が乏しく、用途は不明である。

ＳＤ01　調査区西端部で確認された南北方向に流れる、深さ約5cm程度の浅い溝である。出土遺物はなかった。

ピット　11基を検出した。直径20～30cm、深さが約30～50cmを測る。埋土内に瓦や須恵器、土師器の椀等を投げ入れたものがいくつか見られるが、特にＳＰ03には多量の土器片が投棄されている。

ＳＰ03を含めて、いくつかのピットは掘立柱建物あるいは柵列を構成するものと考えられるが、調査範囲内においては、そのまとまりを確認することはできなかった。

落ち込み　南東隅と南西隅で検出した。それぞれ約10cm程度下がる段落ちとなっている。時代やその用途は不明である。

遺構の時期　これらの遺構から出土した土器・瓦は、およそ11世紀後半のものが多く、神出古窯址群内でこれまで確認されたなかでも古い時期の範疇にあてはまる。

3．ま と め

今回の調査では、平安時代末期頃の土坑、ピット、溝等を検出した。周辺地の調査でも、当該時期の掘立柱建物や溝、土坑を確認しており、当時の集落がこの付近に存在したと考えられる。今回確認した遺構は、その集落の一部を構成するものと判断される。

また遺構の分布状況からみて、今回の調査地より東側に集落の中心がある可能性が考えられる。

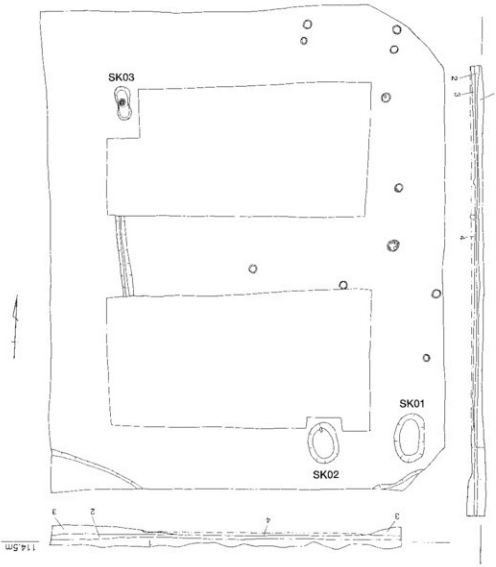
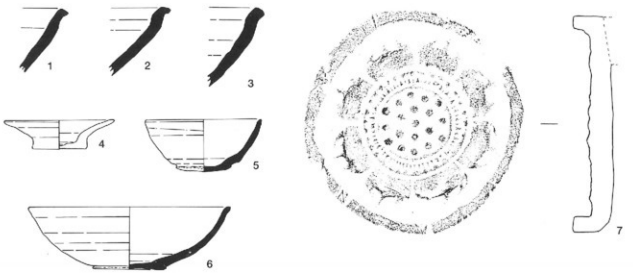


fig. 398
調査区平・断面図



1　SP05　2･7　SK02
3･6　SP03　4･5　SK03

fig. 399　出土遺物実測図

fig. 400　調査区全景

Ⅳ．平成11年度の通常事業に伴う発掘調査

1．郡家（ぐんげ）遺跡　第65次調査

1．はじめに　郡家遺跡は六甲山の南麓、石屋川左岸の沖積地に位置する。郡家という地名が示すとおり、古代官衙がここに置かれていたものと推測される。1979年を初めとして、これまでに64次にわたる発掘調査を実施し、弥生時代から近世に至るまでの遺跡を確認している。

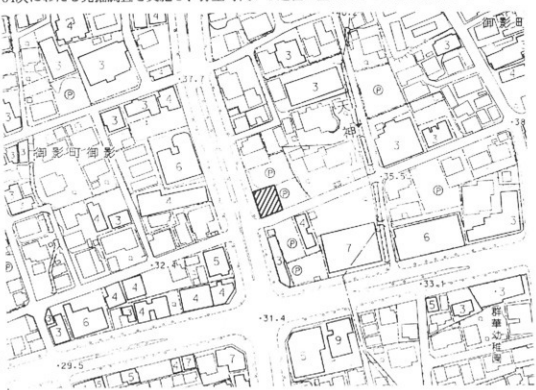


fig. 401
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要　店舗建設に先立ち、工事の影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

工事影響範囲内において2面の遺構面を確認した。遺構面は北から南に下がる緩斜面で、現地表（標高34.9m～35.2m）下約0.7～1.0mで第1遺構面を、同約1.0m～1.1mで第2遺構面を検出した。

第1遺構面　標高33.9m～34.5mで、真南北方向に延びる飛鳥時代のものを含む溝2条と土坑、柱穴などを検出した。このほかには防空壕を確認している。

第2遺構面　標高34.1m～34.2mで、竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、溝1条、土器溜まり1基などを検出した。

SB01　竪穴住居の東辺及び北辺・南辺の一部を確認した。主軸をW20°Nにとり、東辺5.95mを測る。主柱穴は、北東の1基のみ確認した。出土した土器から、6世紀代の住居と考えられる。

SB02　掘立柱建物の西辺と考えられる柱穴列を確認した。主軸をW22°Nにとる。柱穴は4ないし5基を確認したが、さらに南に続く可能性がある。柱穴掘形は平面形が円形で、径60～80cm、深さは遺構検出面から30～60cmである。柱穴内に柱痕などは確認していない。

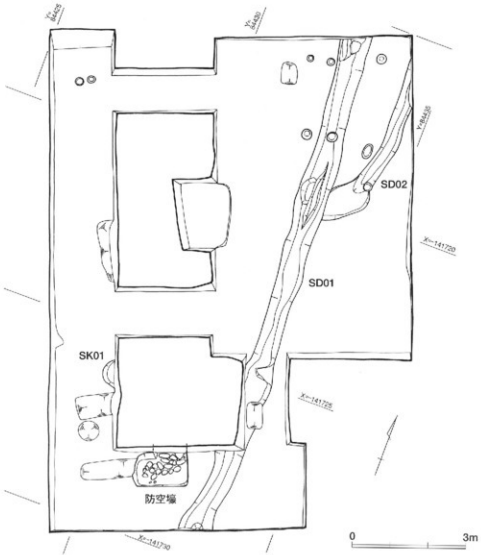


fig. 402
第 1 遺構面平面図

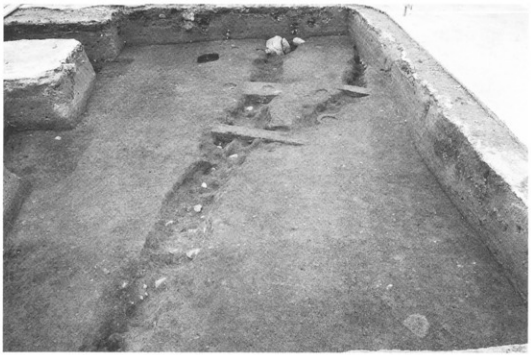


fig. 403
S D01・02

3．ま と め　調査の結果、工事の影響範囲内で２枚の遺構面を検出した。

第１遺構面は飛鳥時代、第２遺構面は古墳時代後期の遺構面である。今回の調査地は郡家遺跡の中心部に近い地点であると認識されていたが、狭い範囲の調査であるにもかかわらず、遺構・遺物を多く確認し、従来からの認識を補強する成果を得た。

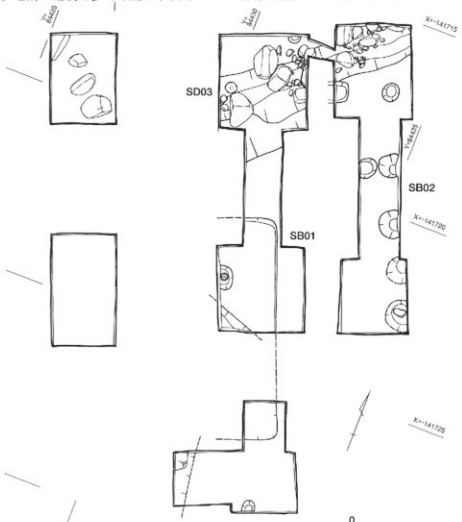
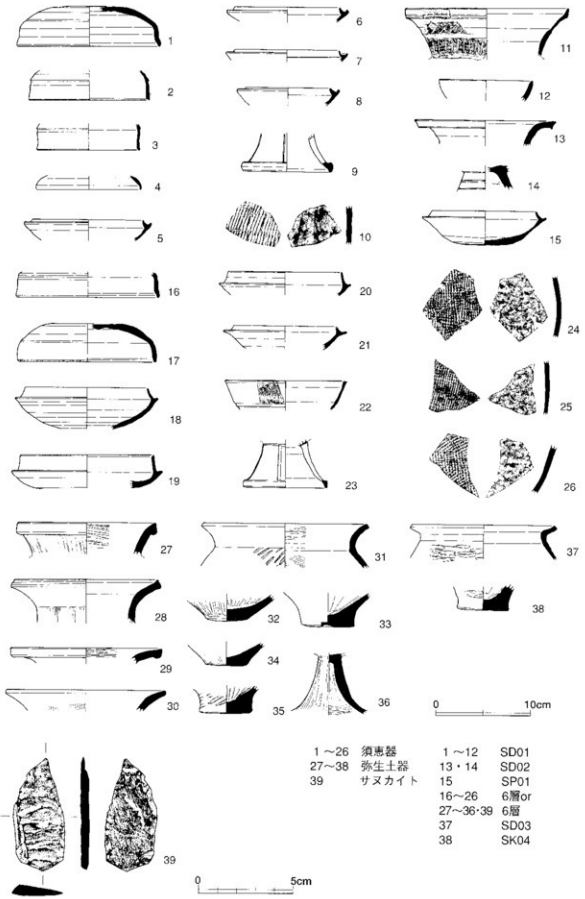


fig. 404
第２遺構面平面図

fig. 405　ＳＢ02

fig. 406　ＳＤ03



1～26	須恵器	1～12	SD01
27～38	弥生土器	13・14	SD02
39	サヌカイト	15	SP01
		16～26	6層or
		27～36･39	6層
		37	SD03
		38	SK04

fig. 407　出土遺物実測図

2．西平野（にしひらの）遺跡　第１次調査

1．はじめに

西平野遺跡は、弥生時代から中世にかけての遺跡である郡家遺跡に隣接し、また中世に一帯の土豪であった平野氏による平野城の伝承も存在していることなどから、昭和62年に共同住宅建設に先立って試掘調査を実施した結果、発見された遺跡である。

今回の調査は、土地区画整理事業に伴うもので、平成11年12月に実施した試掘調査の結果、埋蔵文化財の確認された地区について実施した。

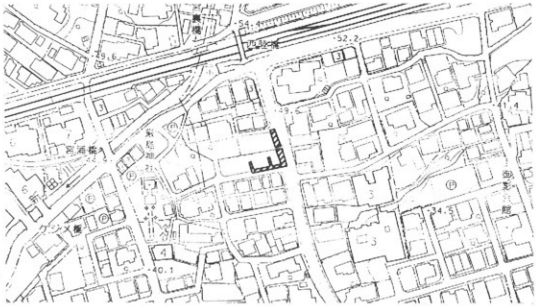


fig. 408
調査地位置図
1：2,500

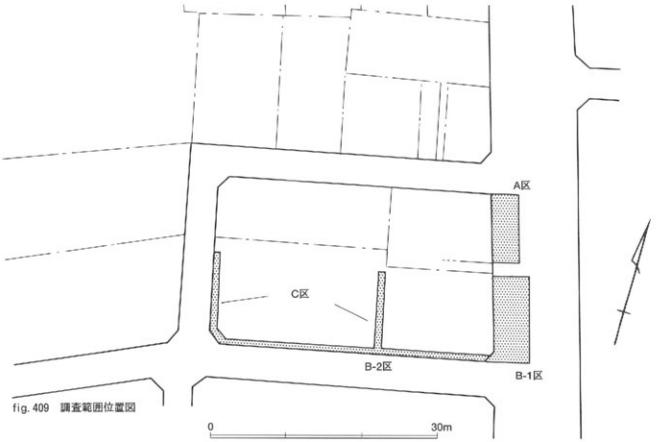


fig. 409　調査範囲位置図

2．調査の概要　調査区は、道路拡幅部分とそれに接続する擁壁部分である。便宜上、北側の道路部分をA区、南側の道路部分をB－1区、東西方向の擁壁部分をB－2区、南北方向の擁壁部分をC区とする。地形的には、北から南に下がる斜面地上に立地する。

基本層序　現代の盛土の下層に旧耕土及び床土状の明黄灰色粘質土が堆積し、A区では現地表下80㎝、B・C区では現地表下35㎝程度で弥生時代から中世の遺物を含む暗灰褐色土となる。この直下が遺構面基盤層である明黄褐色礫土である。

A　区　掘立柱建物1棟、竪穴住居と考えられる遺構1基、及び調査区内では建物としてのまとまりの認められないピット10数基を検出した。

掘立柱建物

SB01　調査区の東辺に沿って3間分の柱穴を検出した。建物は東へ延びると考えられる。

調査区の南部において検出した、弧状を呈し調査区外へと広がる遺構である。幅1ｍ程度の段をもち、すぐ内側に細い溝も認められることから、竪穴住居と考えられる。

焼土坑（SP07）とピットのいくつかが柱穴になると考えられるが、確定はできない。

B－1区　A区の南側の調査区で、A区よりも一段低いところに位置している。

落ち込み状の遺構1ヶ所とピット数基及び土石流跡を検出した。

落ち込み　調査区の南西隅において検出した、深さ約30㎝の落ち込み状の遺構である。西側を土石流によって削平されている。弥生時代後期（Ⅴ様式）の土器が出土した。掘形の壁面が比較的直立し、底面が平坦であること、平面形が隅丸方形に近いことなどから竪穴住居の可能性もある。

土石流　調査区の南東隅を北東から南西に向かって流れる土石流で、北西の肩を検出した。深さ1.0ｍ程度で砂、砂利、粘土の堆積がみられる。

B－2区　ピット14基、落ち込み1ヶ所を検出した。

C　区　中央部の調査区においてピット3基と浅い落ち込みを検出した。

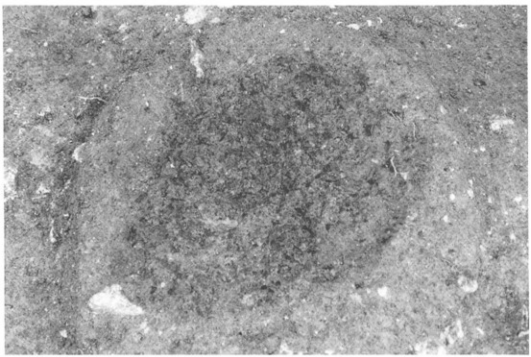


fig. 410
SP07（焼土坑）

3．ま と め

西平野遺跡は、第１次調査以来、長い期間調査の機会がないまま現在に至っていたが、今回区画整理に伴う試掘調査及び本調査を実施した結果、部分的にではあるが、遺構の存在の有無について明らかにすることができた。

ただ第１次調査において確認された、石積みの大溝などの中世中期から後期の平野城に関連すると考えられる遺構は今回は検出されず、10世紀前後の掘立柱建物に伴うピット群と弥生時代後期の住居址状の遺構等を新たに確認した。西平野遺跡は、幅広い時代にわたって多様な様相を示すようである。今後の調査により、さらに明らかになると考えられる。

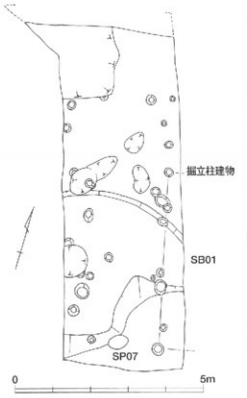


fig. 411　A区平面図

fig. 412　A区全景

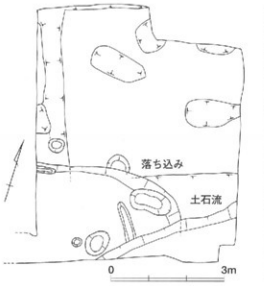


fig. 413　B－１区平面図

fig. 414　B－１区全景

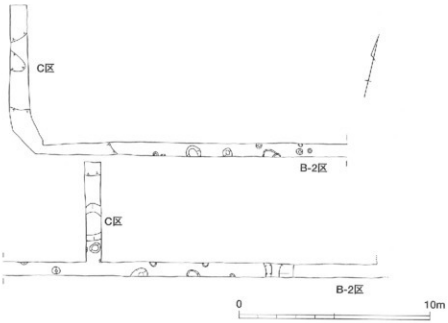


fig. 415
B－2・C区
平面図

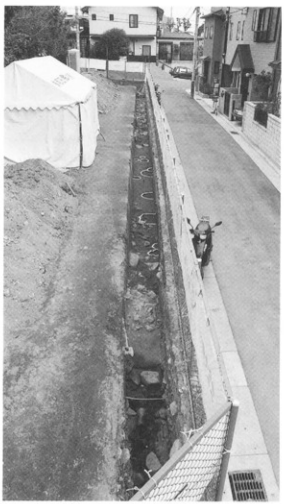


fig. 416　B－2区全景

fig. 417　C区全景

3．日暮（ひぐれ）遺跡　第16次調査

1．はじめに

日暮遺跡は、六甲山系南麓の沖積地末端に立地し、古代から中世当時の海岸線から数百という至近距離に位置する、弥生時代後期から鎌倉・室町時代にかけての集落遺跡である。

周辺は市街地形成の時期が早く、遺跡の分布が明確でなかったが、昭和61年の市営住宅建設に伴う発掘調査で遺跡の存在と状況が明らかにされて以来、十数次におよぶ調査が行われており、次第に遺跡の様相が明らかになってきた。

当該調査地は神戸市が所有する土地であるが、南端部に土留め用の擁壁が造られることになり、工事の影響を受ける部分の発掘調査を実施した。

fig. 418
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

今回の調査地は、第15次調査地の東側に位置している。調査前の敷地は、北側の道路とほぼ水平であったが、南端部は比高差約２ｍの崩落しやすい不安定な法面となっていた。

現地表面から遺物包含層直上までの深さは、約2.3ｍを測る。

基本層序

厚い盛土の下層に近世頃の耕土（暗灰褐色粘性砂質土）、古墳時代末から鎌倉時代頃の土器・土師を含む灰褐色細砂～極細砂が存在する。その下層に黒色～黒褐色砂混じりシルトの堆積層があり、この上面で遺構を確認した。遺構面は、北西から南東方向に徐々に下がっていく。また東半分には、洪水による堆積土と判断される暗黄褐色細砂～極細砂が、遺構面上に堆積している。

検出遺構

飛鳥時代から平安時代頃のピット２基を検出した。そのほか遺構面上には、洪水砂が堆積した際に形成された浅い流路２条と、石積みの側溝等の後世の攪乱、江戸時代末から明治時代初頭頃の耕作に伴う石の詰まった暗渠が、掘り込まれていた。

ＳＰ01　調査区の東寄りで検出した一辺約40㎝の方形のピットである。

ＳＰ02　調査区の西端で検出した直径25㎝のピットで、直径10㎝の柱痕を確認した。

ピット２基は何れも10㎝内外の深さである。埋土からは遺物が出土しないため、遺構の正確な年代は不明であるが、上層の遺物包含層出土の土器及び隣接する第15次調査の検出遺構の状況から、およそ飛鳥時代から平安時代の時期に納まるものと判断される。

3．ま と め

今回の調査では、飛鳥時代から平安時代のピット２基を検出した。ほぼ同時期に、西側の隣接地について実施した第15次調査（本書55～58頁参照）では、当該時期の掘立柱建物２基を検出している。それらの建物の性格は未だ判然としないが、今回検出したピットは、それらの遺構群の一部を構成するものと判断される。また調査地の遺構面は、北西から南東方向に下がる地形となる。東半部では、洪水堆積層である暗黄褐色細砂～極細砂が遺構検出面上で確認し、河川の影響を受けやすい地域へ徐々に変化していくものと考えられる。

なお当遺跡は、当時の海岸線に近く、漁撈具である土錘や蛸壺が多く出土することから、海と何らかの関わりを持った人々の集落址であるといえるが、漁民の村であると判断するには資料が乏しく断言はできない。

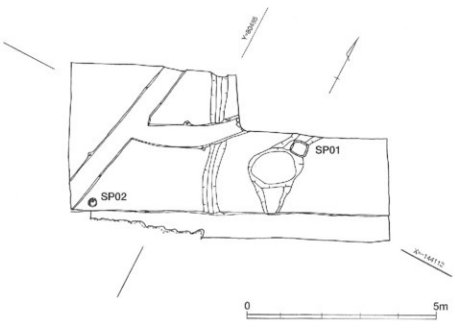


fig. 419
調査区平面図

fig. 420
調査区全景

4．祇園遺跡　第8次調査

1．はじめに

祇園遺跡は神戸市兵庫区上祇園町周辺に広がる遺跡で、天王川左岸の扇状地の扇頂付近に位置する。天王川は有馬道沿いに流下し平野部に抜け、石井川と合流して湊川となる。この湊川の河口付近にかつて大輪田泊があったといわれている。

この遺跡の存在する地域は「ひらの」とよばれ、この地名が治承4年の「福原遷都」に際し、安徳天皇内裏となった平清盛の別業のあったという「平野」の地名と合致し、当地に福原旧都の中枢があったものと推測される。

これまでの調査では、遺物としては縄文時代早期・前期の土器、石器が流路中より出土しているが、遺構として確実に捉えられるのは、弥生時代中期後半以降においてである。特に注目される遺構としては、第2次調査で検出した、平安時代（福原京当時）の屋敷地の一部と、第5次調査で検出した、平安時代（12世紀後半）の溝、土坑、庭園遺構（石垣・園池・島・洲浜等）がある。

fig. 421
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

今回の調査地は、第7次調査地のすぐ北側に位置している。

調査地は、北側から南側に向かって緩やかに傾斜しており、現地表面では、調査区北端と南端の比高差は約0.5m～1.0mである。

基本層序

上層から、表土、盛土、攪乱土、灰色砂質土（旧耕土）、暗黄灰褐色砂質土（旧床土）、暗灰褐色砂質土層（平安時代頃の遺物包含層）、暗褐色シルト層（弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物包含層）、褐色砂礫土層（地山）となる。

今回の調査区内では、近・現代の攪乱が著しく、特に第1遺構面はほとんど削平を受けている。

第１遺構面　現地表下約1.0～1.4ｍ（標高約27.7～28.0ｍ）で検出した、平安時代以降の遺構面である。近・現代の攪乱を著しく受けており、遺構面基盤層である暗灰褐色砂質土が残存していたのは、調査区中央付近のみであった。

検出遺構　石列１ケ所を検出した。

石列１　調査区のほぼ中央で検出した東西方向に延びる石列で、現存長約6.2ｍ、現存高約0.2～0.3ｍ、幅約0.3～0.7ｍを測る。

石材はいずれも人頭大程度の花崗岩の自然石である。現況では１列目及び１段目しか残存していないため、全体の規模・機能等については不明であるが、石垣の一部である可能性が考えられる。

出土遺物が細片であるため、明確な時期についても不明であるが、おそらく平安時代以降であると考えられる。

第２遺構面　地表下約1.3～1.6ｍ（標高約27.5～27.7ｍ）で検出した平安時代頃と考えられる遺構面である。暗褐色シルト上面が遺構面となっている。

検出遺構　ピット24基（ＳＢ201－Ｐ－１～５、ＳＰ201～219）を検出した。直径30～80㎝、深さ10～20㎝を測る。

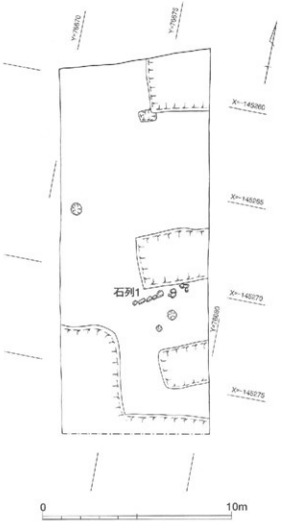


fig. 422　第１遺構面平面図

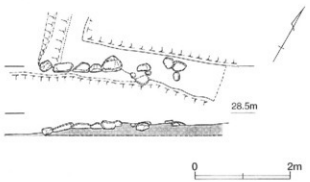


fig. 423　石列１平・断面図

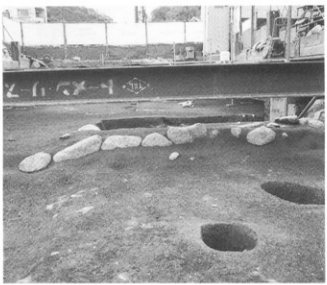


fig. 424　石列１

Ｐ－１～４（ＳＢ201）は、約1.9～2.2ｍ間隔で、ほぼ一列に並んでおり、掘立柱建物または柵列になる可能性が考えられる。

前年度調査区で検出した第２遺構面と同一面であるが、前年度は、古墳時代後期頃と考えられるピットを検出しているが、今回検出したピットは、何れも平安時代頃のものと考えられる。

出土遺物としては、平安時代頃の須恵器・土師器がある。

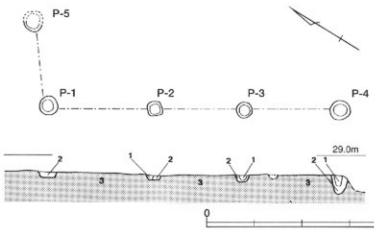


fig. 425
ＳＢ201平・断面図

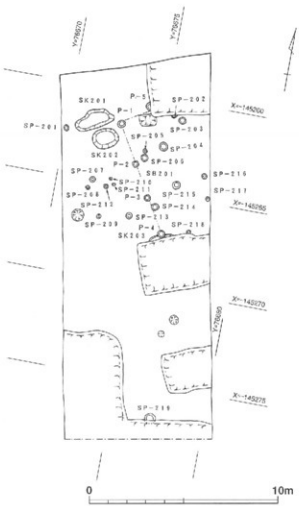


fig. 426　第２遺構面平面図

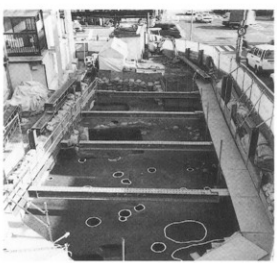


fig. 427　第２遺構面全景

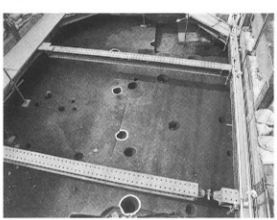


fig. 428　ＳＢ201

第３遺構面　現地表下約1.5～1.8m（標高約27.3～27.5m）で検出した弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の遺構面である。褐色砂礫土上面が遺構面となっている。

第７次調査で検出した第３・４遺構面に相当する。

検出遺構

ＳＤ01　弥生時代後期から古墳時代前期頃の土器等が多量に含む溝状遺構１条を検出した。

調査区のほぼ全域で検出した北西方向から南東方向に流れる溝状遺構で、西肩部のみ検出している。調査区内での規模は、長さ18.0m、幅4.0～8.0m、深さ0.8～1.1mを測る。西肩部も後世に若干の削平を受けていると考えられるため、本来の規模は、幅9.0～10.0m以上、深さ1.3～1.5m以上になるものと推定される。

調査区北側では西側に屈曲している可能性があり、自然の傾斜面に直交していることからみて、自然流路ではなく、人工的な溝状遺構であると考えられる。

断面形は逆台形を呈して、やや緩やかに傾斜しながら深くなり、底面からの傾斜角は、約20～25度を測る。

埋土は、上層（暗灰褐色シルト）、下層（暗褐色シルト・暗茶灰褐色シルト・茶灰褐色シルト）・最下層（褐色シルト・茶褐色シルト・茶褐色粗砂）の概ね３層に大別され、何れの層からも遺物が出土しているが、特に、下層（暗褐色シルト）からは、多量の弥生時代後期末から古墳時代前期頃の遺物が出土している。

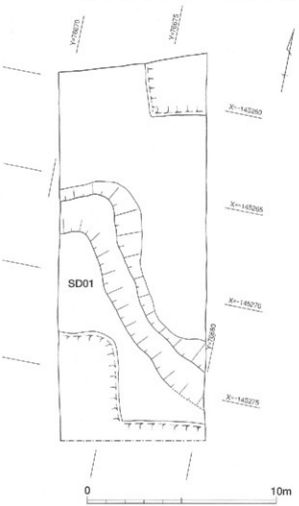


fig. 429　第３遺構面平面図

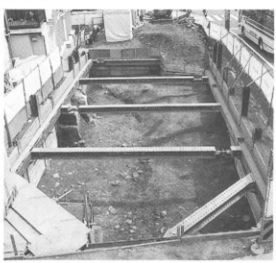


fig. 430　第３遺構面全景

fig. 431　ＳＤ01

fig. 432
ＳＤ01断面

fig. 433　ＳＤ01遺物出土状況

fig. 434　ＳＤ01遺物出土状況

特に西側の肩部付近から遺物が集中して出土する傾向からみて、ＳＤ01の西側より投棄された可能性が高いと考えられる。

ＳＤ01の南方約3.0～10.0ｍでは、第７次調査時に弥生時代後期から古墳時代前期頃の竪穴住居３棟（ＳＢ01～03）を検出している。

竪穴住居と溝が同時期のものであれば、集落の北側を画する環濠になる可能性も考えられるが、第７次調査地及び今回調査地の周辺が未調査であるため、現段階では不明である。

弥生時代後期から古墳時代前期頃の環濠をもつ集落としては、神戸市内では、中央区・熊内遺跡で類例がみられる。平成２年度に実施された第２次調査において、竪穴住居の南西側で、幅4.0～7.0ｍ、深さ1.5～4.0ｍを測る溝状遺構が検出されており、環濠である可能性が考えられている。

出土遺物

各遺構埋土内・遺構面上面及び遺物包含層内より、弥生時代後期から古墳時代前期の土器や平安時代から江戸時代の須恵器・土師器・陶磁器等が、28ℓ入りコンテナ約55箱分出土している。特にＳＤ01の埋土内からは、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が、28ℓ入りコンテナ約40箱分出土している。

3．ま と め

今回の調査地においては、既存建物等による近・現代の攪乱が著しく、平安時代頃の遺構面の遺存状況はあまり良好ではない。

また、第２・５次調査で確認しているような庭園遺構、またはそれに関連すると考えられる遺構も確認していない。

しかしながら、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての溝の一部を確認し、第７次調査結果と合わせて検討すると、集落を画する環濠になる可能性が考えられる。当遺跡の性格や同時期の集落について検討する上において、貴重な資料であるといえる。

また、溝内より多量に出土した土器群は、第７次調査で検出した３棟の竪穴住居から出土した土器群と合わせて、当地域における弥生時代後期後半から庄内併行期の編年を検討する上において、貴重な資料であるといえる。

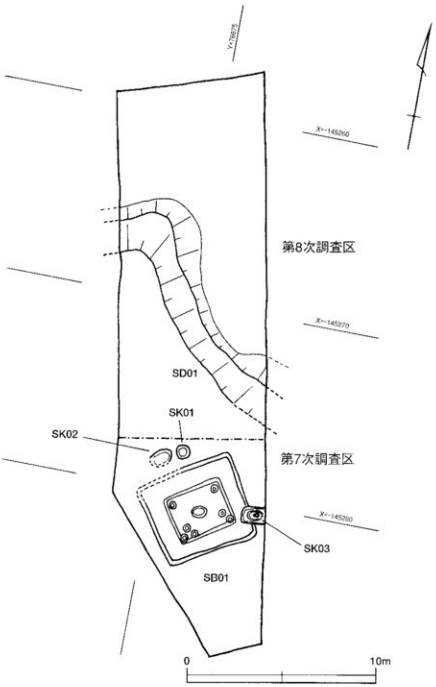


fig. 435
第７・８次調査区
平面図

5．上沢（かみさわ）遺跡　第33次調査

1．はじめに

上沢遺跡は所謂六甲変動で流出し残った大阪層群で形成されている六甲山系南麓の会下山丘陵から派生する微高地上に立地する遺跡で、平成７年以降阪神・淡路大震災後の土地区画整理や個人住宅の建築、山手幹線拡幅に伴う調査で急激に調査事例が増加している。

これまでの調査によって弥生時代前期、弥生時代後期から古墳時代初頭、奈良時代から平安時代、中世の遺構面を確認しており、今まで詳細が不明であった本遺跡は各時期の拠点集落で構成される大規模複合遺跡であったことが明らかになりつつある。

区画整理事業に伴う防災公園の整備計画に伴い、公園対象地の南半分について平成10年度に第28次調査として発掘調査を実施した。残る北半分が今回の調査対象地である。今回の調査地では、第28次調査と比較して遺構面の遺存状況が悪く、遺構の輪郭は極めて不鮮明で認識困難であった。

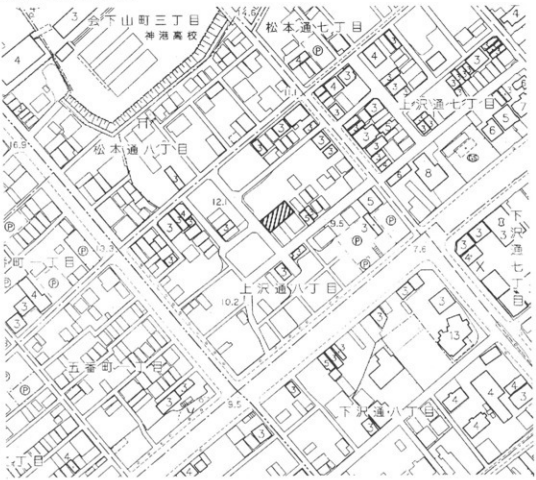


fig. 436
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本層序

大別して、上層から順に、近現代の造成土、旧耕土・床土、遺物包含層群、無遺物層と続く。遺物包含層は調査区の各地点で土質・層数の差が大きく、極めて複雑な堆積状況にある。土層図上では第１遺構面は遺物包含層である灰茶色粘質土の上面、第２遺構面は遺物包含層である灰茶色礫混じり粘質土の上面、第３遺構面は遺物包含層である暗茶褐色砂混じりシルトの上面である。

第１遺構面検出遺構　中世頃の遺構面で、溝１条、土坑１基、ピット９基を検出した。ピットの大半は調査区の西側に集中している。

ＳＤ101　調査区の西端で検出した北東から南西方向に流れる溝で、両端は調査区外に延びるため全長は不明である。幅0.6～0.9ｍ、深さ約20㎝である。

ＳＥ101　調査区の北東寄で検出した井戸で、掘形は直径1.4ｍの円形で、深さは2.3ｍである。内部から板材が多く出土し、底面には杭が４本方形に打ち込まれているため、井戸枠の構造は竪板を四隅の杭から横桟で止める構造であったと推定できる。しかし出土した板材は井戸枠１基を構成するには少ないため、井戸の廃棄時に転用可能な材は抜き取ったと考えられる。下部には直径約60㎝、高さ約60㎝の曲物で水溜が設けられていた。

ＳＫ101　調査区の中央東寄で検出した土坑である。東端は攪乱で破壊されているため規模は不明である。長径1.0ｍ以上、短径0.8ｍ、深さ約60㎝である。

fig. 437　第１遺構面全景

fig. 438　ＳＤ101

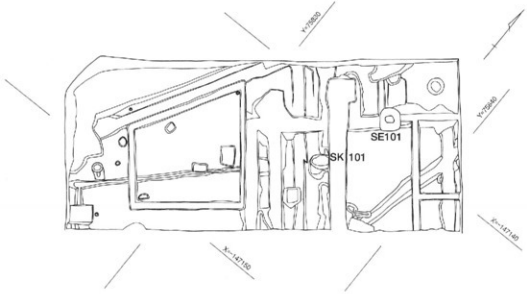


fig. 439
第１遺構面平面図

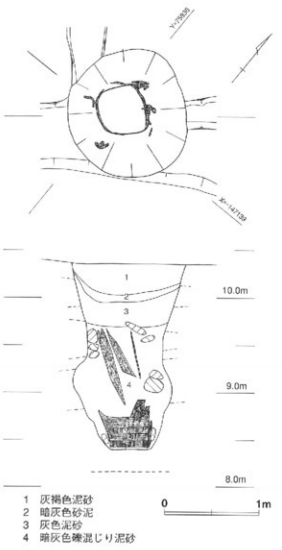


fig. 440　ＳＥ101平・断面図

fig. 441　ＳＥ101

fig. 442　ＳＥ101断面

第２遺構面　弥生時代末頃と奈良時代が同一面化した遺構面で、井戸１基、竪穴住居１棟、溝７条、竪穴住居状の不明遺構１基を検出したほか、ピット60基を検出した。

ＳＢ201　調査区南東端で検出した弥生時代末頃の方形の竪穴住居で、第28次調査検出のＳＢ202の北端部分である。南北検出長1.0ｍ×東西幅4.2ｍで、深さ約20㎝である。東西両端で柱穴の可能性があるピットを１基ずつ検出した。底面には貼床の可能性がある黄褐粘土が極めて薄く存在した。

ＳＤ201　調査区の南端西寄で検出した溝で、ＳＸ201の下面で検出した。急激に浅くなって終わるため端部のごく一部分を検出したのみである。長さ1.3ｍ、幅1.0ｍ、深さ約40㎝である。第28次調査では古墳時代中期の遺構としているが、土師器片が少量出土したのみであるため想定時期の正否は不明である。

ＳＤ202　調査区の南端中央で検出した、弥生時代末頃の北東から南西方向に流れる溝で、急激に深浅・広狭を繰り返して調査区中央で終わる。ＳＸ201の下面で検出し、北東端ではＳＤ207を切る。検出長7.7ｍ、幅0.8～3.1ｍ、深さ0.2～1.0ｍで、埋土は砂や砂礫が主体で流水の痕跡である縞状の構造がみられた。

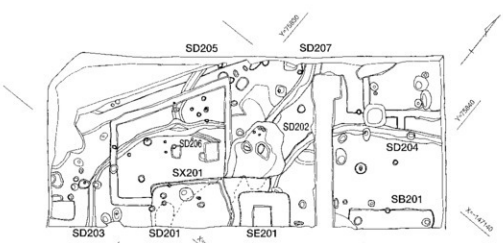


fig. 443
第２遺構面平面図

ＳＤ203　調査区の西半で検出した、北東から南西方向に弧状に巡る弥生時代末頃の溝で、調査区中央で終わる。検出長10.4ｍ、幅0.3～0.9ｍ、深さ10～20㎝である。

ＳＤ204　調査区の東半で検出した、東から南西方向に弧状に巡る弥生時代末頃の溝で、東端は調査区外に延びる。検出長9.0ｍ、幅0.4～0.7ｍ、深さ30～40㎝である。

ＳＤ205　調査区の中央北半で検出した、北東から南西方向の弥生時代末頃の溝で、北東端は調査区外に延びる。検出長3.5ｍ、幅0.4～0.5ｍ、深さ10～15㎝である。南西部分で急激に屈曲してＳＤ206の方向に向かう。規模や埋土が若干異なるが、本来は同一の遺構であった可能性が高い。

ＳＤ206　調査区の中央で検出した、南東から北西方向の弥生時代末頃の溝で、北西端はＳＤ203に切られている。検出長1.6ｍ、幅0.2～0.3ｍ、深さ10～15㎝である。

ＳＤ207　調査区の西寄北半で検出した、北東から南西方向の弥生時代末頃の溝で、北東端は調査区外に延びる。検出長4.1ｍ、幅0.4～0.6ｍ、深さ約35㎝である。

ＳＥ201　調査区の中央南端で検出した奈良時代の井戸で、掘形南端は既に第28次調査で検出している。ただし同調査では13世紀頃の井戸としてＳＥ01と呼称していたが、想定時期に誤認があったためここでは改称した。掘形上面は一辺2.5ｍの方形であるが、上から約１ｍの部分より下方は徐々に円形になる。深さは3.9ｍである。井戸枠は井籠組で長さ約1.1ｍ、高さ15～35㎝、腐食していない部分の厚さ５～７㎝の板材４枚を、内法約90㎝四方になるように端部を凹凸に約10㎝切り込んで組み合わせている。材には節穴が極めて少なく、木取り時に材を厳選していることが判る。材の内面側は平滑に仕上げられていたが、切り込み部には鋸の線状痕、外面側には製材時の手斧の刃痕が明瞭に残るものもあった。長さ約２㎝、高さ約１㎝の小孔が１～数個内外面に貫通している材もあったが、材中の小孔の配置や枠全体での貫通する板材の位置にはあまり規則性はないように思われる。小孔の性格は不明である。材は計15段確認したが、枠内には枠材を構成していた可能性がある板材が転落していたため、構築当初はもう数段分存在した可能性もある。上から２段分は材の腐食が激しかったが、５段目以下の遺存状況は良好である。下から４段分のみ材の中央に太

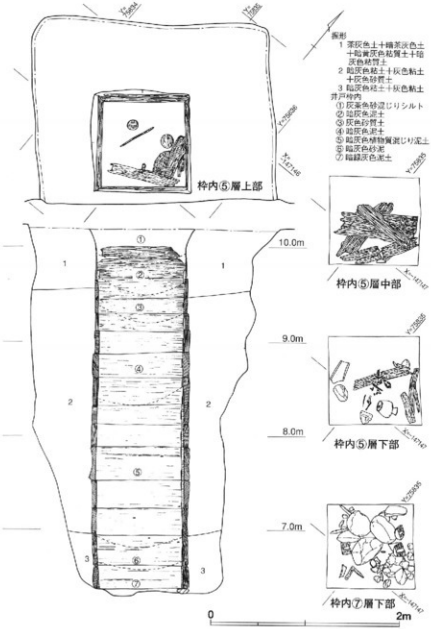


fig. 444　ＳＥ201平・断面図・遺物出土状況図

fig. 445　枠内⑤層中部遺物出土状況

fig. 446　枠内⑤層下部遺物出土状況

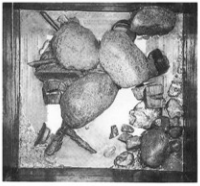


fig. 447　枠内⑦層最下部遺物出土状況

fig. 448　ＳＥ201井籠組井戸枠

fig. 449　ＳＥ201井籠組井戸枠細部

fig. 450　ＳＥ201出土銅鋺

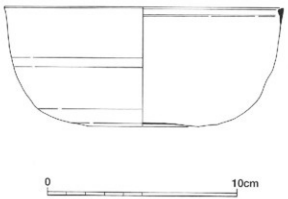


fig. 451　ＳＥ201出土銅鋺実測図

枘をかませて固定しているが、それ以上はそのまま積み上げている。枠内の埋土は上から順に灰茶色砂混じりシルト、暗灰色泥土、灰色砂質土、暗灰色泥土、暗灰色植物片混じり泥土、暗灰色砂泥、暗緑灰色泥土で、掘形は遺構面以下の基盤層を掘削して再度埋め立て、意図的に種類の異なった土を入れた痕跡はないように思われる。

遺物は土器以外には丸瓦、金属製品、多量の木製品、獣骨、植物種子が出土した。土器・木製品の多くは井戸の廃棄後に投棄されたと考えられる。獣骨にはウサギ・ヘビ・イタチ・カエル等があり、植物種子とともに自然にあるいは誤って落ちたものと考えられる。金属製品には銅鋺・小形仿製鏡等があり、井戸の底面で出土しているため井戸を構築した際の祭祀に使用された可能性がある。丸瓦は小形で非常に良く焼き締まっており、類例に乏しい。１点のみ「万」の字が墨書された土師器片が出土した。

銅鋺　銅・錫・鉛の合金製で、法隆寺や正倉院の伝世品中に類例があるが、発掘調査において奈良時代のものが完形で出土したのは奈良県坂田寺に続いて２例目である。形状は口縁端部内面を少し厚くさせ、胴部は丸く、底は平底で高台の付かないものである。器面は轆轤で非常に薄く挽き削った痕跡が観察される。口縁径14.5cm、底径5.5cm、深さ6.3cm、重さ193.58ｇである。

井戸の底面で出土したが、直上に約30cm大の石が乗っていたにもかかわらず、破損していないことから、井戸構築時の祭祀で人為的に石を上に置いた可能性がある。伝世品の例からみて本来は10点前後が入籠状態になっている重ね鋺の一部であったと推定できるが、何らかの理由でこの１点のみが井戸の中に入れられたと考えられる。

ＳＸ201　調査区の中央南端で検出した、弥生時代末頃の長方形の竪穴住居状の不明遺構である。南北検出長2.6ｍ×東西幅6.3ｍで、深さ約15cmである。北端と中央東寄に幅0.2～0.3ｍ、深さ約５cmの小溝が通る。

第３遺構面　弥生時代前期の遺構面で、土坑２基、ピット９基を検出した。

ＳＫ301　調査区の西寄南半で検出した円形の土坑で、直径1.7ｍ、深さ約30cmである。埋土に焼土、炭、灰が混じることや、直径に対して深さが浅いことから、地面を浅く掘り窪めて火を焚いた可能性が考えられる。

ＳＫ302　調査区の西寄南半で検出した楕円形の土坑である。長径0.6ｍ、短径0.5ｍ、深さ約20cmである。

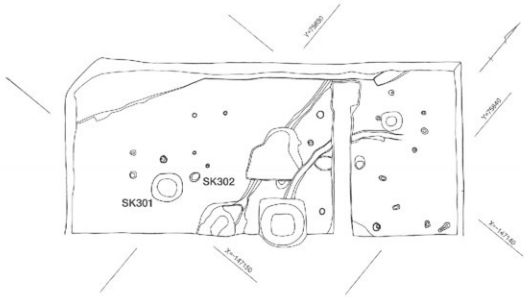


fig. 452
第３遺構面平面図

3．ま と め

これまでの調査によって、上沢遺跡は弥生時代前期、弥生時代後期から古墳時代初頭、奈良から平安時代、中世の遺構面をもつ大規模複合遺跡であることが解明されているが、特に奈良から平安時代の様相は注目される。大規模な掘立柱建物や、巡方・鈴具・円面硯・土馬といった、一般の集落ではあまり見られない遺構や遺物が検出されているため、古代の役所あるいは寺院が存在していた可能性を窺わせる。北西に隣接する室内遺跡（房王寺跡？）からは軒丸瓦・軒平瓦や塑像の菩薩立像が出土しており、明確な遺構は未確認であるが当時の寺院の存在が推定できる。

そのような状況の中で精巧な井籠組の井戸が検出され、井戸の底から法隆寺や正倉院に伝えられたものと酷似する銅鋺が出土したことは、奈良から平安時代における当遺跡の特殊性をさらに強調することになる。したがって現在は住宅街であるこの一帯には、かつて古代寺院を建立するだけの力と、貴重な銅鋺を入手しさらに井戸の祭祀に使用できる力をもった人物が存在したことはほぼ確実といえよう。

fig. 453　第３遺構面全景

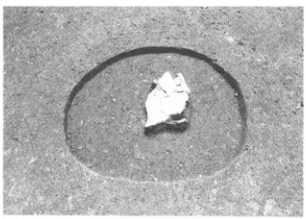


fig. 454　ＳＫ302

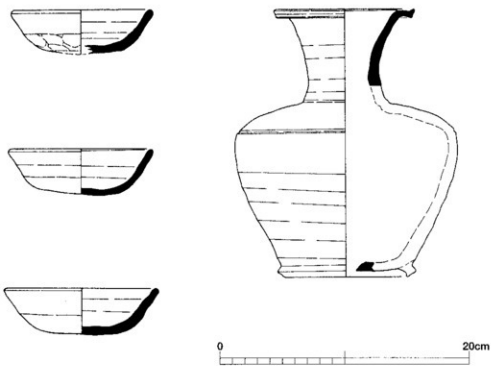


fig. 455
S E 201
出土遺物実測図

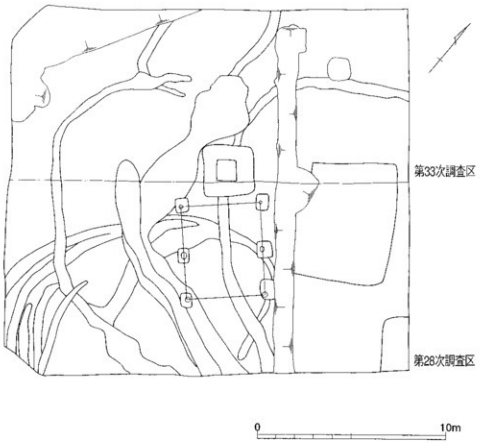


fig. 456
第28・33次
調査区平面図

4．植生史関連調査

はじめに　　上沢遺跡では、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代の集落跡が検出され、遺構構築材や木製品、種実遺体等の植物質遺物も多数出土している。このうち奈良時代については、遺構の検出状況から寺院もしくは官衙関連施設の可能性が考えられている。

本報告では、各調査区から出土した木製品や構築材などについて樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。また、種実遺体の同定を行い、古植生や植物利用などに関する資料を得る。

Ⅰ．木製品等の樹種

（1）試料　　試料は、第3・8・16・33次調査で出土した木製品や、井戸部材などの構築材193点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表に記した。

（2）方法　　剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

（3）結果　　樹種同定結果を表に示す。試料は、針葉樹9種類（マツ属複維管束亜属・モミ属・ツガ属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ・サワラ・ヒノキ科・カヤ）と広葉樹15種類（コナラ属・アカガシ亜属・クリ・スダジイ・クスノキ科・ヤブツバキ・サカキ・ウツギ属・サクラ属・ユズリハ属・センダン・ケンポナシ属・ツツジ属・シャシャンボ・タイミンタチバナ・ハイノキ属ハイノキ節）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・モミ属（*Abies*）　　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、数珠状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・ツガ属（*Tsuga*）　　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞が認められる。傷害樹脂道が認められる試料がある。放射組織は仮道管と柔細胞で構成され、柔細胞壁は滑らかで、数珠状末端壁が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　　スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

樹種同定結果（1）

調査次	登録番号	番　号	出土地区	遺　　構	遺　物　名	時　　期	樹　　種
3次		1	3区	ＳＥ01	井戸枠１　くり板材	奈良時代	コウヤマキ
		2	3区	ＳＥ01	井戸枠２　くり板材	奈良時代	コウヤマキ
		3	3区	ＳＥ01	井戸枠３　くり板材	奈良時代	コウヤマキ
		4	3区	ＳＥ01	井戸枠４　割杭	奈良時代	コウヤマキ
		5	3区	ＳＥ01	井戸枠　　割杭	奈良時代	カヤ
		6	3区	ＳＥ01	井戸枠　　割杭	奈良時代	コウヤマキ
		7	3区	ＳＥ01	井戸枠　　割杭	奈良時代	ヒノキ
		8	3区	ＳＥ01	井戸枠　　割杭	奈良時代	コウヤマキ
8次		1	2区東半	ＳＥ01	杭	12世紀	ユズリハ属
		2	2区東半	ＳＥ01	板	12世紀	ヒノキ
		3	2区東半	ＳＥ01	部材（ホゾ穴）	12世紀	コウヤマキ
		4	2区東半	ＳＥ01	板	12世紀	ツガ属
		5	2区東半	ＳＥ01	板	12世紀	ツガ属
		6	2区東半	ＳＥ01	板	12世紀	モミ属
		7	2区東半	ＳＥ01	板	12世紀	コウヤマキ
		8	2区東半	ＳＥ01	板	12世紀	ヒノキ
		9	2区東半	ＳＥ01	板	12世紀	コウヤマキ
		10	2区東半	ＳＥ01	板	12世紀	コウヤマキ
		11	2区東半	ＳＥ01	板	12世紀	コウヤマキ
		12	2区東半	ＳＥ01	板	12世紀	ツガ属
		13	2区東半	ＳＥ01	角材	12世紀	モミ属
		14	2区東半	ＳＥ01	円形板の一部	12世紀	ヒノキ
		15	2区東半	ＳＥ01	曲物	12世紀	ヒノキ
		16	2区東半	ＳＥ01曲物内	木繊	12世紀	サカキ
		17	2区東半	ＳＥ01曲物内	木繊	12世紀	スダジイ
		18	2区東半	ＳＥ01	板	12世紀	モミ属
		19	2区東半	ＳＥ01	枝	12世紀	ウツギ属
		20	2区東半	ＳＥ01	箸	12世紀	コウヤマキ
16次		1	4区	ＳＥ201	井戸枠　1	12世紀	ツガ属
		2	4区	ＳＥ201	井戸枠　2	12世紀	ツガ属
		3	4区	ＳＥ201	井戸枠　3	12世紀	ツガ属
		4	4区	ＳＥ201	井戸枠　4	12世紀	ツガ属
		5	4区	ＳＥ201	井戸枠　5	12世紀	ツガ属
		6	4区	ＳＥ201	井戸枠　6	12世紀	ツガ属
		7	4区	ＳＥ201	井戸枠　7	12世紀	ツガ属
		8	4区	ＳＥ201	支柱　　8	12世紀	ツガ属
		9	4区	ＳＥ201	支柱８の横桟	12世紀	マツ属複維管束亜属
		10	4区	ＳＥ201	支柱　　9	12世紀	ツガ属
		11	4区	ＳＥ201	支柱９の横桟	12世紀	マツ属複維管束亜属
		12	4区	ＳＥ201	用途不明木器	12世紀	マツ属複維管束亜属
		13	4区	ＳＥ201	木繊	12世紀	コナラ属アカガシ亜属
		14	4区	ＳＥ201	井戸枠	12世紀	コウヤマキ
		15	4区	ＳＥ201	井戸枠	12世紀	ツガ属
		16	4区	ＳＥ201	井戸枠	12世紀	ツガ属
		17	4区	ＳＥ201	井戸枠	12世紀	モミ属
		18	4区	ＳＥ201	井戸枠	12世紀	ツガ属
		19	4区	ＳＥ201	井戸枠	12世紀	モミ属
		20	4区	ＳＥ201	井戸枠	12世紀	ツガ属
		21	4区	ＳＥ201	井戸枠	12世紀	ツガ属
		22	4区	ＳＥ201	井戸枠	12世紀	ツガ属
		23	4区	ＳＥ201	曲物	12世紀	ヒノキ
		24	4区	ＳＥ201	井戸枠材	12世紀	マツ属複維管束亜属
		25	4区	ＳＥ201	井戸枠材	12世紀	マツ属複維管束亜属
		26	4区	ＳＥ201	井戸枠材	12世紀	マツ属複維管束亜属
		27	4区	ＳＥ201	井戸枠材	12世紀	マツ属複維管束亜属
		28	4区	ＳＥ201	井戸枠材	12世紀	コウヤマキ
		29	4区	ＳＥ201	井戸枠材	12世紀	マツ属複維管束亜属
		30	5区	ＳＢ202ＳＰ206	柱根	12世紀	ツガ属
		31	4区	ＳＰ209	柱根	12世紀	コウヤマキ

樹種同定結果（2）

調査次	登録番号	番　号	出土地区	遺　構	遺物名	時　期	樹　種
16次		32	3区	SP216	柱根	12世紀	クリ
		33	5区	SP263	柱根	12世紀	クリ
		34	3区	SP385	柱根	古墳時代後期	コウヤマキ
		35	5区	SP3144	柱根	12世紀	モミ属
33次	6442	1W－1	東寄北半	SE101	端部加工丸材	中世	クスノキ科
	6444	1W－4	東寄北半	SE101	板材	中世	ツガ属
	6446	1W－13	東寄北半	SE101	割板	中世	モミ属
	6448	1W－15	東寄北半	SE101	角材（ホゾ穴）	中世	ヒノキ
	6449	1W－16	東寄北半	SE101	板材	中世	ツガ属
	6451	1W－20	東寄北半	SE101	割板	中世	モミ属
	6452	1W－21	東寄北半	SE101	割板	中世	モミ属
	6453	1W－23	東寄北半	SE101	丸杭	中世	ヤブツバキ
	6455	1W－25	東寄北半	SE101	丸杭	中世	ヤブツバキ
	6456	1W－26	東寄北半	SE101	板材	中世	ヒノキ
	6458	1W－29	東寄北半	SE101	丸杭	中世	ヤブツバキ
	6459	1W－30	東寄北半	SE101	丸杭	中世	サカキ
	6460	1W－32	東寄北半	SE101	丸杭	中世	ヤブツバキ
	6461	1W－33	東寄北半	SE101	板材	中世	ヒノキ
	6463	1W－35	東寄北半	SE101	板材	中世	ヒノキ
	6464	1W－36	東寄北半	SE101	丸杭	中世	タイミンタチバナ
	6465	1W－37	東寄北半	SE101	丸杭	中世	タイミンタチバナ
	6466	1W－38	東寄北半	SE101	丸杭	中世	ヤブツバキ
	6468	1W－40	東寄北半	SE101	板材	中世	ヒノキ
	6469	1W－41	東寄北半	SE101	丸杭	中世	タイミンタチバナ
	6470	1W－42	東寄北半	SE101	板材	中世	モミ属
	6472	1W－44	東寄北半	SE101	板材	中世	ヒノキ
	6473	1W－45	東寄北半	SE101	板材	中世	ヒノキ
	6474	1W－46	東寄北半	SE101	板材	中世	ヒノキ
	6475	3	中央南半	SE201枠内4層	曲物底板（東側）	奈良時代	ヒノキ
	6476	4	中央南半	SE201枠内4層	曲物底板（西側）	奈良時代	ヒノキ
	6477	6	中央南半	SE201枠内5層	不明木製品	奈良時代	ヒノキ
	6478	8W－1	中央南半	SE201枠内5層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6479	8W－2	中央南半	SE201枠内5層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6480	8W－3	中央南半	SE201枠内5層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6481	8W－4	中央南半	SE201枠内5層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6482	8W－5	中央南半	SE201枠内5層	両端加工丸材	奈良時代	ハイノキ属ハイノキ節
	6483	9W－6	中央南半	SE201枠内5層（中部）	割板	奈良時代	ヒノキ
	6484	9W－7	中央南半	SE201枠内5層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6485	9W－8	中央南半	SE201枠内5層	丸材	奈良時代	センダン
	6486	9W－9	中央南半	SE201枠内5層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6487	9W－10	中央南半	SE201枠内5層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6488	10W－11	中央南半	SE201枠内5層（下部）	割板	奈良時代	ヒノキ
	6489	10W－12	中央南半	SE201枠内5層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6490	10W－13	中央南半	SE201枠内5層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6491	10W－14	中央南半	SE201枠内5層	角材	奈良時代	ヒノキ
	6492	11 － 1	中央南半	SE201枠内5層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6493	11 － 2	中央南半	SE201枠内5層	端部加工丸材	奈良時代	クスノキ科
	6494	12 － 1	中央南半	SE201枠内6層	端部加工丸材	奈良時代	シャシャンボ
	6495	12 － 2	中央南半	SE201枠内6層	端部加工丸材	奈良時代	コナラ属アカガシ亜属
	6496	13W－1	中央南半	SE201枠内7層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6497	13W－2	中央南半	SE201枠内7層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6498	13W－3	中央南半	SE201枠内7層	端部加工丸材	奈良時代	マツ属複維管束亜属
	6499	13W－4	中央南半	SE201枠内7層	割板	奈良時代	ヒノキ
	6500	14	中央南半	SE201枠内7層	端部加工丸材	奈良時代	ツツジ属
	6501	15 － 1	東寄北半	SE101	曲物（井戸枠）	中世	ヒノキ
	6502	15 － 2	東寄北半	SE101	曲物（井戸枠）	中世	ヒノキ
	6503	17W－1,3	中央南半	SE201枠内最下層	潜車	奈良時代	サクラ属
	6504	17W－2	中央南半	SE201枠内最下層	潜車	奈良時代	マタタビ属
	6505	17W－4	中央南半	SE201枠内最下層	角材	奈良時代	ヒノキ

樹種同定結果（3）

調査次	登録番号	番　号	出土地区	遺　構	遺　物　名	時　期	樹　種
	6506	17W－6	中央南半	ＳＥ201枠内最下層	端部加工丸材	奈良時代	コナラ属アカガシ亜属
	6507	17W－7	中央南半	ＳＥ201枠内最下層	端部加工丸材	奈良時代	サカキ
	6509	18 － 1	中央南半	ＳＥ201枠内7層～最下層（掩付近）	チョウナ屑	奈良時代	ヒノキ
	6510	18 － 2	中央南半	ＳＥ201枠内7層～最下層（掩付近）	チョウナ屑	奈良時代	センダン
	6511		東寄北半	ＳＥ101	板材	中世	ツガ属
	6512		東寄北半	ＳＥ101	板材	中世	マツ属複維管束亜属
	6513	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材1－N	奈良時代	ヒノキ
	6514	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材2－E	奈良時代	ヒノキ科
	6515	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材2－W	奈良時代	ヒノキ
	6516	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材2－S	奈良時代	ヒノキ
	6517	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材2－N	奈良時代	ヒノキ
	6518	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材3－E	奈良時代	ヒノキ科
	6519	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材3－W	奈良時代	ヒノキ
	6520	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材3－S	奈良時代	ヒノキ
	6521	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材3－N	奈良時代	ヒノキ科
	6522	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材4－E	奈良時代	ヒノキ
	6523	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材4－W	奈良時代	ヒノキ
	6524	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材4－S	奈良時代	ヒノキ
	6525	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材4－N	奈良時代	ヒノキ
	6526	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材5－E	奈良時代	ヒノキ
	6527	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材5－W	奈良時代	ヒノキ
	6528	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材5－S	奈良時代	ヒノキ
	6529	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材5－N	奈良時代	ヒノキ
	6530	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材6－E	奈良時代	ヒノキ
	6531	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材6－W	奈良時代	ヒノキ
	6532	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材6－S	奈良時代	ヒノキ
	6533	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材6－N	奈良時代	サワラ
	6534	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材7－E	奈良時代	ヒノキ
	6535	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材7－W	奈良時代	ヒノキ
33次	6536	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材7－S	奈良時代	ヒノキ
	6537	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材7－N	奈良時代	ヒノキ
	6538	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材8－E	奈良時代	ヒノキ
	6539	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材8－W	奈良時代	ヒノキ
	6540	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材8－S	奈良時代	ヒノキ
	6541	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材8－N	奈良時代	サワラ
	6542	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材9－E	奈良時代	ヒノキ
	6543	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材9－W	奈良時代	ヒノキ
	6544	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材9－S	奈良時代	ヒノキ
	6545	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材9－N	奈良時代	ヒノキ
	6546	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材10－E	奈良時代	スギ
	6547	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材10－W	奈良時代	スギ
	6548	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材10－S	奈良時代	スギ
	6549	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材10－N	奈良時代	ヒノキ
	6550	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材11－E	奈良時代	スギ
	6551	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材11－W	奈良時代	ヒノキ
	6552	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材11－S	奈良時代	サワラ
	6553	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材11－N	奈良時代	スギ
	6554	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材12－E	奈良時代	サワラ
	6555	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材12－W	奈良時代	スギ
	6556	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材12－S	奈良時代	サワラ
	6557	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材12－N	奈良時代	ヒノキ
	6558	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材13－E	奈良時代	スギ
	6559	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材13－W	奈良時代	スギ
	6560	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材13－S	奈良時代	スギ
	6561	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材13－N	奈良時代	スギ
	6562	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材14－E	奈良時代	スギ
	6563	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材14－W	奈良時代	サワラ
	6564	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材14－S	奈良時代	サワラ
	6565	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材14－N	奈良時代	スギ

樹種同定結果（4）

調査次	登録番号	番　号	出土地区	遺　　構	遺 物 名	時　　期	樹　　種
33次	6566	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材15-E	奈良時代	スギ
	6567	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材15-W	奈良時代	スギ
	6568	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材15-S	奈良時代	スギ
	6569	2	中央南半	ＳＥ201	井戸枠材15-N	奈良時代	スギ
	6570	2	中央南半	ＳＥ201	ダボ13-E	奈良時代	スギ
	6571	2	中央南半	ＳＥ201	ダボ13-W	奈良時代	ヒノキ
	6572	2	中央南半	ＳＥ201	ダボ13-S	奈良時代	ヒノキ
	6573	2	中央南半	ＳＥ201	ダボ13-N	奈良時代	ヒノキ
	6574	2	中央南半	ＳＥ201	ダボ14-E	奈良時代	ヒノキ
	6575	2	中央南半	ＳＥ201	ダボ14-W	奈良時代	ヒノキ
	6576	2	中央南半	ＳＥ201	ダボ14-S	奈良時代	ヒノキ
	6577	2	中央南半	ＳＥ201	ダボ14-N	奈良時代	ヒノキ
	6578	2	中央南半	ＳＥ201	ダボ15-E	奈良時代	ヒノキ
	6579	2	中央南半	ＳＥ201	ダボ15-W	奈良時代	ヒノキ
	6580	2	中央南半	ＳＥ201	ダボ15-S	奈良時代	ヒノキ
	6581	2	中央南半	ＳＥ201	ダボ15-N	奈良時代	ヒノキ

・コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.）　コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は不明瞭。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1～5細胞高。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・サワラ（*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はスギ型～ヒノキ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

・カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）　イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・スダジイ（*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai）　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で緩やか～やや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

・クスノキ科（Lauraceae）

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、1～2細胞幅、1～20細胞高。柔細胞には油細胞が認められる。

・ヤブツバキ（*Camellia japonica* L.）　ツバキ科ツバキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～2細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。柔細胞には結晶細胞が顕著に認められる。

・サカキ（*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.）　ツバキ科サカキ属

散孔材で、道管径は極小径、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合して散在し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。

・ウツギ属（*Deutzia*）　ユキノシタ科

散孔材で、道管径は極小径、管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独、希に2個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、段数は20～30。放射組織は大型の異性で、1～3細胞幅、鞘細胞が認められる。

・サクラ属（*Prunus*）　バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。

・ユズリハ属（*Daphniphyllum*）　トウダイグサ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独および2～3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。

・センダン（*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel）　センダン科センダン属

環孔材で、孔圏部は1～5列、孔圏外で緩やか～やや急激に管径を減じたのち、多数の道管が塊状に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～30細胞高。

・ケンポナシ属（*Hovenia*）　　クロウメモドキ科

環孔材で、孔圏部は不明、孔圏外でやや急激～緩やかに管径を減じたのち、単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～5細胞幅、1～40細胞高。

・ツツジ属（*Rhododendron*）　　ツツジ科

散孔材で、極小径の道管がほぼ単独、希に複合して、年輪界に一様に散在し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅰ～Ⅱ型、1～3列、1～15細胞高で、単列組織が多い。

・シャシャンボ（*Vaccinium bracteatum* Thunb.）　　ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に散在し、分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ型、単列で10細胞高前後のものと、5～7細胞幅、30～60細胞高のものとがある。放射組織には鞘細胞が認められる。

・タイミンタチバナ（*Myrsine seguinii* Lev.）　　ヤブコウジ科ツルマンリョウ属

散孔材で、道管は単独もしくは2個が放射方向または接線方向に複合して散在し、分布密度は高くない。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型の異性で、1～8細胞幅、100細胞高を越える。

・ハイノキ属ハイノキ節（*Symplocos* sect. Lodhra）　　ハイノキ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～5個が複合して散在し、分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～2細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。

（4）考察

樹種同定を行った試料は、主に古代から中世の井戸跡や柱穴から出土した構築部材と木製品であり、井戸枠などの井戸構築材が最も多い。各遺構・用途別の種類構成を表に示す。

井戸構築材は、井戸枠、支柱、ダボなどの部位が出土している。使用されている種類は、基本的には針葉樹を中心としている。井戸材に針葉樹が多く利用されている結果は、玉津田中遺跡の鎌倉時代の井戸材の種類構成（島地，1996）とも一致する。また、同様の事例は、これまで各地で行われた調査結果（島地・伊東，1988；伊東，1990）でも見ることができる。遺構別に見ると、第3次調査区ＳＥ01ではコウヤマキ、第16次調査区ＳＥ201ではツガ属、第33次調査区ＳＥ101とＳＥ201ではヒノキがそれぞれ多く利用されており、遺構によって種類構成に違いが認められる。針葉樹を利用しているのは、広葉樹材に比較して一般的に加工が容易であること、耐水性が高いこと等の材質を考慮した結果と考えられる。遺構による種類構成の違いは、構築時期によって入手できる木材が変わったことや、各井戸の使用者の階級等が反映されている可能性がある。

これらの井戸のうち、第33次調査区ＳＥ201は、板材を桝形に15段組んでいる。樹種同定結果を見ると、1段～9段までは、部材のほとんどがヒノキである。しかし、10段～15段ではヒノキは少なく、スギとサワラが多くなる。このことから、1段～9段と10段～15段とで用材選択が異なっていた可能性がある。種類構成が異なる背景として、常に水に浸

かる部分と、時々乾燥することがある部分とで、耐湿性等を考慮して用材を変えたこと等が考えられる。しかし、詳細は不明である。

遺構別・用途別種類構成

遺構	時代	用途	樹種	板材管束亜属	モミ属	ツガ属	スギ	コウヤマキ	ヒノキ	サワラ	ヒノキ科	カヤ	アカガシ亜属	クリ	スダジイ	クスノキ科	ヤブツバキ	チカキ	ウツギ属	サクラ属	ユズリハ属	センダン	ケンポナシ属	ツツジ属	シャシャンボ	タイミンタチバナ	ハイノキ節	合計
3次	SE01	奈良時代	井戸枠 割杭					3	1			1																5
			井戸枠 くり板材					3																				3
8次	SE01	12世紀	板		2	3		4	2																			11
			枝																	1								1
			円形板						1																			1
			角材		1																							1
			杭																		1							1
			箸					1																				1
			部材					1																				1
			曲物						1																			1
			木錘													1		1										2
16次		古墳時代後期	柱根					1																				1
	SE201	12世紀	井戸枠	5	2	13		2																				22
			支柱			2																						2
			支柱の横桟	2																								2
			曲物						1																			1
			木錘										1															1
			用途不明木器	1																								1
		12世紀	柱根		1	1		1							2													5
33次	SE101	中世	板材	1	1	3			7																			12
			角材						1																			1
			端部加工丸材													1												1
			曲物（井戸枠）						2																			2
			丸杭														5	1								3		9
			割板		3																							3
	SE201	奈良時代	井戸枠材				16		31	7	3																	57
			ダボ13-E				1		11																			12
			角材						2																			2
			滑車																	1		1					2
			端部加工丸材	1									2			1		1							1	1		7
			チョウナ屑						1													1						2
			不明木製品						1																			1
			曲物底板						2																			2
			丸材																			1						1
			両端加工丸材																								1	1
			割板						15																			15
合計				10	10	22	17	16	79	7	3	1	3	2	1	2	5	3	1	1	1	2	1	1	1	3	1	193

柱材では、針葉樹のモミ属、ツガ属、コウヤマキ、広葉樹のクリが認められた。針葉樹の3種類は、井戸材の用材選択とも一致している。いずれも大木になる種類であり、大型の部材を作ることができる。このうち、コウヤマキについては、白水遺跡第4次調査（11世紀）と玉津田中遺跡（鎌倉時代）、クリは玉津田中遺跡（鎌倉時代）で柱材に認められた例がある（島地，1996；植田，1999）。また、コウヤマキは、平城宮跡から出土した柱材に、ヒノキと共に利用されていたことが知られている（伊東・島地，1979）。本遺跡においても、大型建築物などの柱材として利用されていたことが推定される。クリは、強度や耐朽性に優れた材質を有し、柱材としての出土例も多い（島地・伊東，1988）。材質を考慮した用材選択と考えられる。これらの種類が同一の建物に利用されていたか否かは不明である。しかし、栃木県足利市法界寺跡では、落葉広葉樹のコナラ節、クリと、針葉樹のカヤが同じ建物に利用されていた例が報告されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1995）。このことを考慮すれば、本遺跡においても、針葉樹と広葉樹が混在して利用されていた可能性がある。

その他の木製品や部材を見ると、角材や板材では、基本的に針葉樹材が多い。これも井戸材と同様に加工性や耐水性等を考慮した用材選択と考えられる。このうち、第8次調査区から出土した円形板の一部については、樹種がヒノキであることやその形状から曲物の底や蓋などの用途が考えられる。一方、木錘、滑車、杭では、樹種同定を行った全点が広葉樹材であり、角材や板材とは用材選択が異なる。木錘は、常緑広葉樹のアカガシ亜属、スダジイ、サカキが利用されている。いずれも重厚な材質を有していることから、材質を考慮した用材選択と考えられる。滑車は、サクラ属とケンポナシ属であった。このうち、サクラ属は木目が均質で適度な堅さと靭性があり、加工も容易である。このような加工性と強度・靭性を兼ね備えた木材が選択されたと考えられる。

杭は、これまで各地で行われた調査でも多くの種類が確認されている（島地・伊東，1988；伊東，1990）。また、東大阪市宮ノ下遺跡第1次調査では、杭材373点について樹種同定を行い、合計33種類が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1996）。これらの調査事例から、杭材は周辺に生育していた種類、加工時の余材、廃材の転用など、入手できる様々な木材が利用されていたことが推定される。今回の種類では、ヤブツバキ、サカキ、タイミンタチバナが認められた。ヤブツバキやサカキは、暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり、タイミンタチバナはその林床に生育する。このことから、遺跡周辺にはこれらの種類が生育する常緑広葉樹林が見られたと考えられる。

チョウナ屑は、加工時に生じた木屑であり、ヒノキとセンダンが認められた。長野県屋代遺跡群では、このような木屑が大量に出土しており、加工法による分類とその樹種同定が行われている（宮島，1999；高橋・辻本，1999）。その結果では、合計39種類が認められ、製品に多く見られたサワラが木屑にも多いことが指摘されている。今回認められた2種類は、製品にも認められており、とくにヒノキは様々な用途に多数出土している。このことから、ヒノキやセンダンの製品が、遺跡内で加工されていたことが推定される。

Ⅱ．種実遺体の種類

（1）試料　　試料は、第33次調査区奈良時代とみられるＳＥ201出土の種実と、中世とみられるＳＥ101出土の種子計９点である。整理の都合上、当社にて試料番号１～９の通し番号を付した。各試料の詳細は、同定結果と共に表３に記した。

（2）方法　　双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。同定した種実は種類ごとに瓶に入れ、ホウ酸とホウ砂の混合液中にて保存する。

（3）結果　　結果を表３に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

・アカマツ（*Pinus densiflora* Sieb. et Zicc.）　　マツ科マツ属

球果が検出された。円錐状卵型で、大きなもので５㎝程度。柄はほとんどない。種鱗は長楕円状の矩形を呈し、先端部は肥厚する。先端部の肥厚は、不規則な４～５角形である。肥厚部は比較的薄く、中央に短い突起がある。

・カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）　　イチイ科カヤ属

種子の破片が検出された。大きさは１㎝程度。先端部はやや尖る。種皮は褐色で堅く、表面には筋状の模様がある。・クマシデ（*Carpinus japonica* Blume）　カバノキ科クマシデ属果実が検出された。黒褐色で、大きさは５㎜程度。側面観は涙型、上面観は凸レンズ型。表面には縦方向に数本の筋が存在する。

・コナラ属（*Quercus* sp.）　　ブナ科

果実が検出された。大きさは１㎝程度。黒色で、表面は薄くてやや堅く、光沢がある。下端には、座についていた後が、褐色のざらつく部分としてのこる。

種実同定結果

遺構	層位など	試料番号	アカマツ	カヤ	クマシデ	コナラ属	モモ	ウメ	センダン	クマノミズキ	ガマズミ属	イネ	コムギ	アサ	マメ類	ノブドウ	アオツヅラフジ	スズメウリ	メロン類	オナモミ属	不明	昆虫
ＳＥ101		1					1															
ＳＥ201	壺内５層	5									1						1			1		
	枠内　最下層（腕付近）	8		1		13	2	1												2	1	
	枠内？	9					1															
	枠内４層	3							1		1	1	2		3	多	2	19		28	4	3
	枠内５層	2						5								2				1		
		4											1			多	2		1	28	2	
	枠内６層	6			2		1		2	1	1		5	2		1				24	4	
	枠内７層	7	1		1															多	8	

・クマシデ（*Carpinus japonica* Blume）　カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。黒褐色で、大きさは5㎜程度。側面観は涙型、上面観は凸レンズ型。表面には縦方向に数本の筋が存在する。

・コナラ属（*Quercus* sp.）　ブナ科

果実が検出された。大きさは1㎝程度。黒色で、表面は薄くてやや堅く、光沢がある。下端には、座についていた後が、褐色のざらつく部分としてのこる。

・ウメ（*Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zicc.）　バラ科サクラ属

核が検出された。褐色、核の形は楕円形で偏平である。大きさは1.5㎝程度。丸く大きな臍点がありへこむ。側面の一方には縫合線が発達する。表面は不規則にくぼみが配列する。

・モモ（*Prunus parsica* Batsch）　バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。褐色～黒褐色で大きさは3㎝程度。核の形は楕円形でやや偏平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

・センダン（*Melia Azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel）　センダン科センダン属

核が検出された。褐色で堅い。側面観は楕円形で、上面観は星型。大きさは1㎝程度。縦方向に数本の陵が見られる。

・ノブドウ（*Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv.）　ブドウ科ノブドウ属

種子が検出された。黒色、ほぼ球形で大きさは4㎜程度。背面には「さじ状」の「へそ」がある。種皮は厚く硬い。

・クマノミズキ（*Cornus macrophylla* Wallich）　ミズキ科ミズキ属

核が検出された。灰褐色で大きさは4㎜程度。縦方向にややつぶれた球形。下端に臍がある。縦方向に走る浅い溝がみられる。

・ガマズミ属（*Viburnum* sp.）　スイカズラ科

種子が検出された。黒色、円盤状で、偏平。大きさは4㎜程度。一端が突出する。種皮は堅くてやや光沢があり、若干の凹凸がある。

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

炭化した胚乳が検出された。胚乳の大きさは5㎜程度。胚が位置する部分は欠如し大きく窪んでいる。表面には縦に平行な隆起構造が数本認められる。

・コムギ（*Triticum aestivum* L.）　イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており、大きさは4㎜程度。楕円形で全体的に丸みを帯びている。片側には1本の深い溝があり、その反対側胚の痕跡がある。

・アサ（Cannabis sativa L.）　クワ科アサ属

種子が検出された。灰褐色で楕円形。大きさは4㎜程度。縦に全周する稜があり、下端におおきな「へそ」がある。表面は薄くて堅く、ややざらつく。

・マメ類（Leguminosae sp.）

炭化した種子が検出された。大きさは4㎜程度。偏平な楕円形で、側面に縦長の「へそ」が存在する。

・アオツズラフジ（*Cocculus orbiculatus*（L.）DC.）　　ツズラフジ科アオツズラフジ属

核が検出された。褐色で、大きさは4㎜程度。楕円形で扁平。外周は比厚し、放射状に細かい隆起がある。表面は堅くて厚く、ざらつく。

・スズメウリ（*Melothria japonica* Maxim.）　　ウリ科スズメウリ属

種子が検出された。大きさは5㎜程度。楕円形で扁平。側面に大きな「へそ」がある。中央部はへこみ、膜が薄くなっている。

・メロン類（*Cucumis melo* L.）　　ウリ科キュウリ属

種子が検出された。大きさは7㎜程度。側面観は楕円形、上面観はやや偏平な楕円形。表面は比較的平滑。

・オナモミ属（*Xanthium* sp.）　　キク科

果実が検出された。褐色で大きさは8㎜程度。表面は厚くて柔らかく、弾力がある。表面には大きさ1㎜程度のかぎ状の刺がある。

（4）考察

検出された種類をみると、有用植物に関しては、栽培のため渡来した種類と、自生していたものがある。また、周辺植生を構成している種類は、二次林を構成するものや林縁部に生育するものなどが多い。

栽培のため渡来したものは、モモ、ウメ、イネ、コムギ、アサ、マメ類、メロン類がある。当時の栽培・利用が考えられるが、これらはいずれも出土例が多く、各地で広く栽培されていたことが伺われる。また、周囲の山野からの採取によって食料としていた植物は、カヤ、コナラ属、ガマズミ属がある。この中でもコナラ属やカヤは収量が多く保存が利くことから、重要な植物質食料であったと思われる。

周辺植生を構成している種類のうち、アカマツは二次林を構成する種類である。近畿地方では、約1,500年前を境にして、人間の植生破壊が進んでアカマツなどの二次林が増加したとされる（前田，1984など）。おそらく、奈良時代の遺跡周辺でもアカマツ二次林が広く分布していたものと考えられる。ガマズミ属、クマシデ、センダン、クマノミズキなどの木本類は、林縁部などに多く生育する。おそらく、後背山地と遺跡との境界部分に生育していたものに由来すると思われる。また、ノブドウ、アオツヅラフジ、スズメウリなどのつる植物も林縁部など日当たりのよい場所に多いことから、これらも付近に生育していたとみられる。

引用文献

伊東隆夫（1990）「日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ　木材研究・資料，26」p.91－189　京都大学木材研究所

伊東隆夫・島地　謙（1979）「古代における建造物柱材の使用樹種，木材研究資料，14」p.49－76　京都大学木材研究所

前田安大（1984）「花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷」

宮脇　昭編『日本植生誌　近畿』p.87－99　至文堂

宮島義和（1999）「古代の木質遺物」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26　－更埴市内その5－　更埴条里遺跡・屋代遺跡群　－古代1編－　本文』p.239－268　日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター

パリノ・サーヴェイ株式会社（1995）「法界寺跡第8次～第10次発掘調査に伴う自然科学分析調査の成果」足利市埋蔵文化財調査報告第29集『法界寺跡発掘調査概要』p.162－176　足利市教育委員会

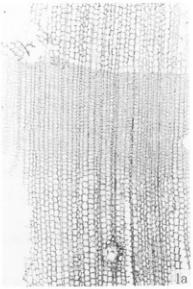
パリノ・サーヴェイ株式会社（1996）「出土木製品の樹種」『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書　－第1分冊－』p.113－138　東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会

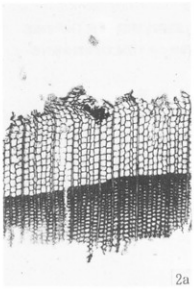
島地　謙（1996）「玉津田中遺跡出土木製品の樹種」兵庫県文化財調査報告第135－6冊『神戸市西区　玉津田中遺跡　－第6分冊（総括編）－　－田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』p.15－49　兵庫県教育委員会

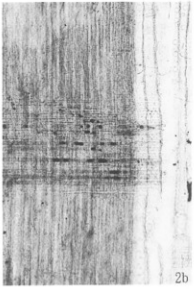
島地　謙・伊東隆夫編（1988）『日本の遺跡出土木製品総覧』p.296　雄山閣

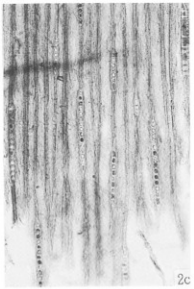
高橋　敦・辻本崇夫（1999）「木製品・自然木、炭化材の樹種」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26　－更埴市内その5－　更埴条里遺跡・屋代遺跡群　－古代1編－　本文』p.333－337　日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター

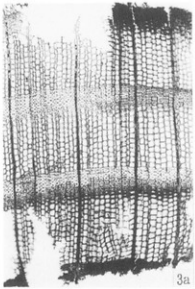
植田弥生（1999）「白水遺跡第4次調査から出土した木製品の樹種」『白水遺跡　第4次　－神戸国際港都建設事業神戸市白水特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』p.66－72　神戸市教育委員会．

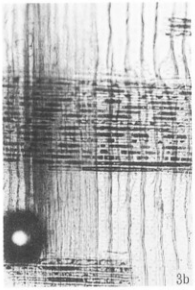


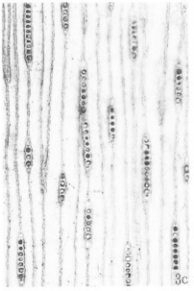








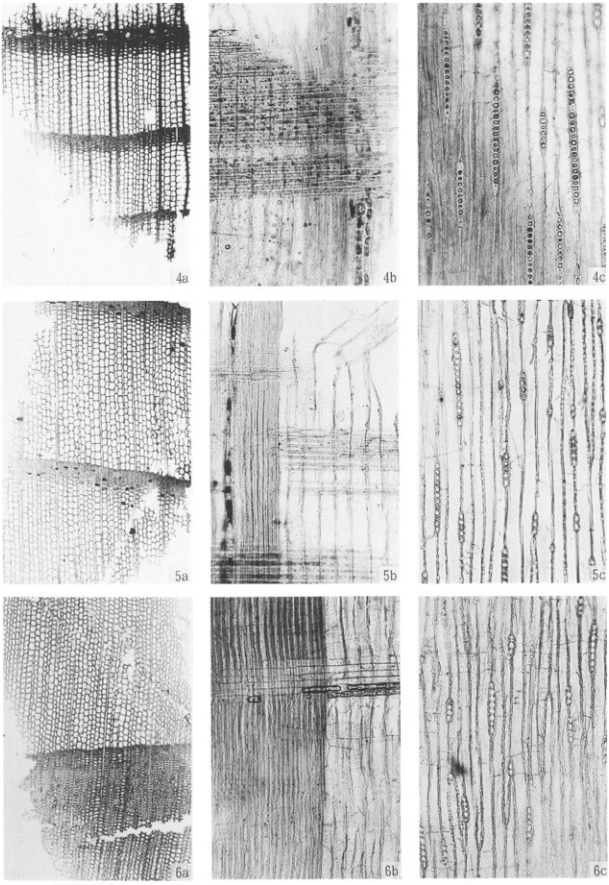




1.マツ属複維管束亜属（第33次 W6512）
2.モミ属（第8次 W13）
3.ツガ属（第8次 W4）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b，c

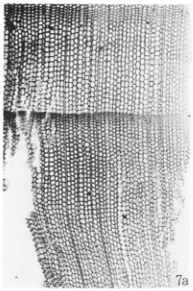
fig. 457　上沢遺跡第８・33次調査出土木材樹種

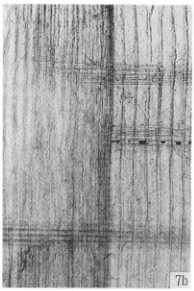


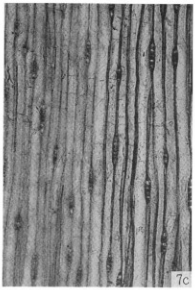
4.ツガ属（第16次 W7）
5.スギ（第33次 W6559）
6.コウヤマキ（第3次 W1）
a：木口，b：柾目，c：板目

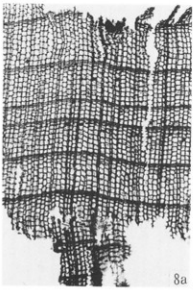
200μm：a
200μm：b，c

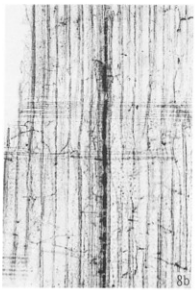
fig. 458　上沢遺跡第３・16・33次調査出土木材樹種

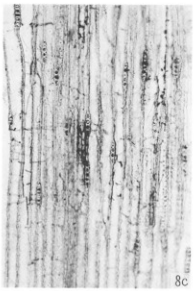


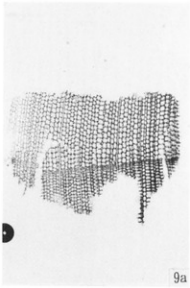








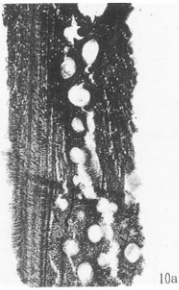


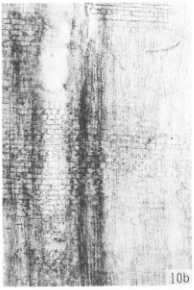


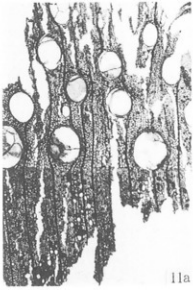
7.ヒノキ（第3次 W7）
8.サワラ（第33次 W6533）
9.カヤ（第3次 W5）
a：木口，b：柾目，c：板目

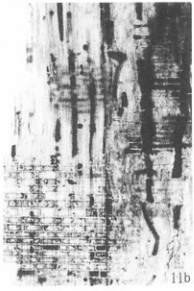
200μm：a
200μm：b, c

fig. 459　上沢遺跡第３・33次調査出土木材樹種



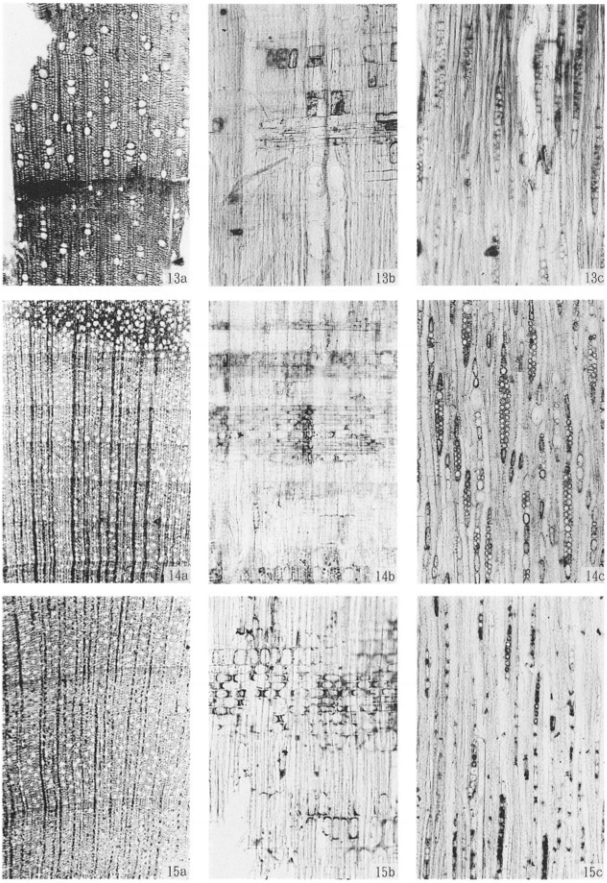






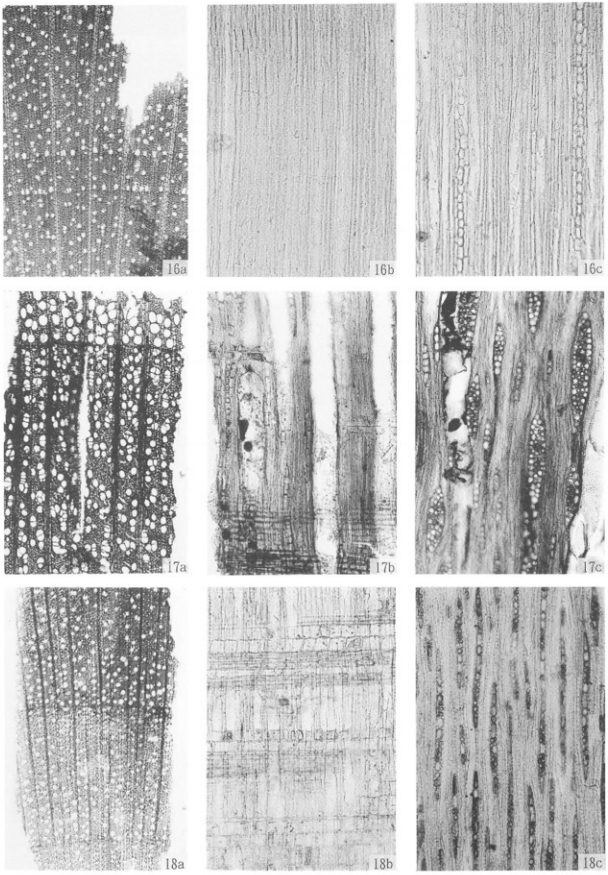
200μm：a
200μm：b，c

10.コナラ属アカガシ亜属（第16次 W13）
11.クリ（第16次 W33）
12.スダジイ（第8次 W17）
a：木口，b：柾目，c：板目
fig. 460　上沢遺跡第８・16次調査出土木材樹種



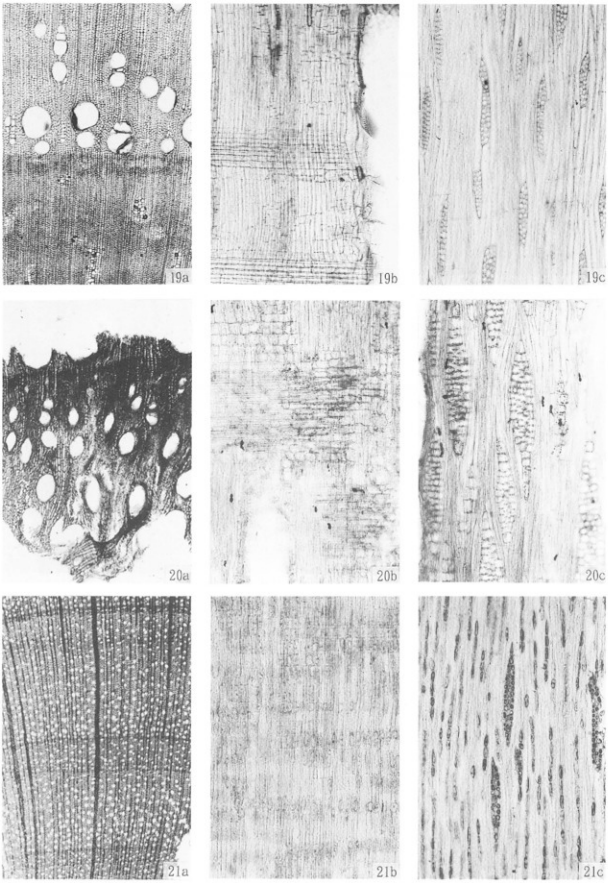
13. クスノキ科（第33次 W6442）
14. ヤブツバキ（第33次 W6453）
15. サカキ（第33次 W6507）
a：木口，b：柾目，c：板目

fig. 461　上沢遺跡第33次調査出土木材樹種



16.ウツギ属（第8次 W19）
17.サクラ属（第33次 W6503）
18.ユズリハ属（第8次 W1）
a：木口，b：柾目，c：板目

fig. 462　上沢遺跡第８・33次調査出土木材樹種



19.センダン（第33次 W6485）
20.ケンポナシ属（第33次 W6504）
21.ツツジ属（第33次 W6500）
a：木口、b：柾目、c：板目

fig. 463　上沢遺跡第33次調査出土木材樹種